せんだいメディアテーク　考えるテーブル

第８回 民話 ゆうわ座 ― 話に遊び 話を結び 座に集う ―

あの日から10年が経って ～ 災害について考える ～

目 次

◆ 「民話 ゆうわ座」について 全体司会 小田嶋 利江 p.2

（記録　寺嶋 大輔）

◆ 第一部 私たちが記録してきたこと 進行 小野　和子 p.3

『双葉町を襲った放射能からのがれて』

（福島県双葉郡双葉町） 目黒　とみ子さん（みやぎ民話の会） P.5

（記録　加藤 恵子）

『閖上　津波に消えた町のむかしの暮らし』

（宮城県名取市閖上） 早坂 泰子さん（みやぎ民話の会） p.13

朗読 倉林 惠子

（記録　倉林 惠子）

『小さな町を呑み込んだ巨大津波夫』

（宮城県亘理郡山元町） 庄司アイさん（みやぎ民話の会・やまもと民話の会） p.18

（記録　島津 信子）

◆ みなさんと感想や意見の交換　その一 p.22

〈 休　憩 〉

◆ 第二部 祖先はどのように災害を語ってきたか 進行 小田嶋 利江 p.23

〈地震〉 『井戸に落ちた地震』『福島のマンゼロク』　島津信子・倉林惠子

〈津波〉 『白大丸　黒大丸』『末の松山波こさじとは』『三陸の大津波』　倉林惠子・山田裕子

〈飢饉〉 『おはつとわらし』『膳の湯』『騒がしいしし頭』　加藤恵子・寺嶋大輔

〈疫病〉 『どすになった娘と猫』　寺嶋大輔

〈水害〉 『かわづら土手の人柱』『橋かけ鬼六』　小田嶋利江・島津信子

〈旱魃〉 『天から落ちた雷小僧』　小田嶋利江

（記録　山田 裕子）

◆ みなさんと感想や意見の交換　その二 p.42

(記録　小田嶋 利江)

第８回 民話 ゆうわ座　各担当者

〈当日〉 司会進行 小田嶋 利江・小野 和子

語り 小田嶋 利江・加藤 惠子・倉林 惠子・島津 信子・山田 裕子・寺嶋 大輔

板書 瀬尾 夏美

撮影・録音 長崎 由幹 ・ 福原 悠介

手話通訳・要約筆記派遣 みやぎ通訳派遣センター

ｓｍｔスタッフ 飯川 晃・服部 暁典

〈記録〉 文字起し 小田嶋 利江・加藤 恵子・倉林 惠子・島津 信子・寺嶋 大輔・山田 裕子

第８回 民話ゆうわ座 ― 話に遊び 輪を結び 座に集う ―

あの日から10年が経って ～ 災害について考える ～

◆ 『民話ゆうわ座』について

司会進行　小田嶋 利江（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

【みやぎ民話の会と〈民話ゆうわ座〉】

　みなさん、とてもあわただしい日なのにもかかわらず、ほとんどの方が来ていただきまして本当にありがとうございました。「民話ゆうわ座」、第８回になりましたけれども、「民話ゆうわ座」については毎回ご説明しているんですけれども、今回もごく簡単に、最初に説明させていただきたいと思います。

　「民話ゆうわ座」の〈民話〉とは文字通り、口から耳へ、耳から口へと我々の先祖から我々の手元までずーっと伝えられてきたお話、たくさんのお話、さまざまなお話です。みやぎ民話の会は、その「民話」を40年以上にわたって村や町を訪ねて、それをひとつひとつ記録してまいりました。ここでは、その我々が集めてきた民話の数々をひとつの手がかりとして見たり聞いたりしていただきます。もうひとつてがかりとなるのが、その民話を聞き歩くのを「採訪」と言いますけれども、その語り手のもとに訪ねて、採訪したときに我々聞き手が語り手とのやりとりのなかで、さまざまなことを考えさせられ、さまざまなことを問いかけられた、そのことを手がかりとしてここで民話をひとつの入り口として、みんなで考えていこうとする場なんですね。格式とか権威とかそういうものから自由になって、みんなで対等で、自由自在に意見を出し合おうという意味で「話に遊び、輪を結び、座に集う」という意味で、「ゆうわ座」という名前をつけました。

【〈第８回民話ゆうわ座〉のテーマと構成】

今回はですね、「あの日から10年が経って」、つまり、2011年3月11日の大地震・大津波から10年以上が経って、「災害について考える」というテーマです。第一部と第二部に分かれておりまして、第一部は「私たちが記録してきたこと」、つまり、あの日の大地震・大津波に関わる、そこにつらなるいろいろな人々の体験とか記憶を記録してきたいろいろな営みがありました。それについて、それに携わった人々に語ってもらうというのが第一部です。第一部ではつまり、本当に今、我々のすぐ手元にある、災害を体験した我々個々の記憶を、記録を記述することをいろいろ見つめてみよう、そういう事実に向き合ってみようというところです。

それに対して第二部は、そうした「あの日」だけではなくて、もっと視野を広げて、時間的にも空間的にも広げて、長い歴史の中で我々の先祖たちがそうした災害にかかわる体験や記憶、それを踏まえながらさまざまな話や物語を伝えてきた、それを我々が集めてきた話のなかから、そのいくつかをみなさんに紹介して、そういうもう少し広い視野のなかで災害のお話・物語がどう語られてきたかについて考えようとするところです。

じつは第一部と第二部は、そのように一見違うように見えますけれども、過去の災害体験から伝承された先祖の記憶というのは、実はそのときの各時代の人々の体験や記憶と物語がじつは地続きであるということを、もし、垣間見られたらいいなと考えています。

以上で今日の全体の解説をいたしましたので、次にさっそく第一部に入りたいと思いますので、第一部の担当の小野さんにお渡ししたいと思います。

記録　寺嶋 大輔（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

◆ 第一部　私たちが記録してきたこと

進行　小野 和子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

【わたしたちがこの10年でしてきたこと】

みなさんこんにちは。ようこそおいでいただきまして、ありがとうございます。私は第一部の司会・進行を担当します小野和子と申します。よろしくおねがいします。

「あの日」から10年が過ぎましたと言いますか、11年目を迎えております。今朝、また津波のニュースをテレビで見ながら、なにか胸にしみてくるような、ぞっとするような思いで画面を見ておりましたが、11年前の3月11日のことをあらためて思い返したりしておりました。この10年を振り返りまして、私たちがしてきたことの一部をみなさんに紹介させていただきたいと思います。

してきたことは何かと言いますと、私どもは民話を記録する仕事をしてきましたが、この10年の間には震災の記録をなんとかできないものか、それは「民話」というかたちではないにしても、なんとか記録できないものかと思いまして、いくつかのそれに関する仕事をしてまいりました。

【震災の記録集三冊とその三人の作り手 庄司アイさん】

今日はですね、そこで私どもが記録してきた3冊の本がございます、記録集がございます。その記録集の中心になっていただいた方々にここに登場していただいて、話を聞かせてもらいたいと思ったんですが、実は三人来ていただく予定のところを、二人の方がここに来ていただくことができなくなりました。

それは、チラシにあります三人目の山元町の庄司アイさん―アイさんは、家屋敷も全部流されながら、震災の後、本当に死にものぐるいになって震災の記録をなさった方です。私と同い年で昭和9年生まれですから決して若くないんですけれども、この10年間休まずにひとつひとつの震災についての語りの記録をしてこられました。やまもと民話の会のみなさんと一緒にその記録をして、記録集を残されました。でも、今日ここに来ていただくことができなくなりましたのは、昨年の10月の末にアイさんは病気に……病気のために、亡くなってしまわれました。

【三人の作り手 早坂泰子さん】

そうして、心を遺しながらあの世に逝ってしまわれたわけですけれども、それからもうひとかた、閖上出身の早坂泰子さんという私どもの仲間がおりまして、早坂さんは自分が育った閖上が今度の震災でみなさんもご存知のように跡形も無く流されてしまって街全体が無くなったような状況になったことに非常に心を痛め続けておられて、自分がそこから栄養をもらって大きくなったあの閖上のかつての記録をなんとかできないものかっていうことを相談を受けまして、早坂さんと私ともうひとりの河井さんっていう三人の仲間で、かつての閖上の記録というようなものをやってまいりました。

その二冊目の早坂さんなんですけれども、早坂さんも体調を崩されて、昨年暮れから入院されてここに来ていただくことができなくなりました。早坂さんは昭和8年生まれです。私はさっき言いましたように庄司アイさんと同じく昭和9年、本当に昭和ひとけたの終わりのほうの三人で九十に近くなるばあさんばっかりなんですけれども、いつも何かがあればばあさん同士集まっていろんなことを話したり、これからのことも希望を持って語ったりしたものですが、今日ここには、ほんとうに私ひとりしか来ることができません。

【三人の作り手 目黒とみ子さん】

それで、三人のうちの目黒トミ子さんは元気に今日は三人分を代表してここに来ていただきましたので、後で話していただきますけれども、早坂さんの分はですね、実は「こんなこと話したいんだ」なんて彼女は今日ここに立ってみなさんに自分の失ってしまったふるさとへの思いを綴ったものを、私に見せてくださっておりました。それでそれを私どもの仲間の倉林さん、倉林恵子さんに早坂さんに代わって、心を込めて朗読していただくことにしました。

最後の庄司アイさんについては、わたくしがアイさんに代わって、アイさんがなさってきたことを三人目の登場者に代わって話をさせていただきたいと、こんなふうに思っております。

で、一番はじめの目黒トミ子さんに登場していただくわけで、目黒さんのことについて最初にちょっと話をさせていただきたいと思います。

【震災の年の〈みやぎ民話の学校〉】

少し話は飛ぶんですけれども、あの震災が起こった2011年の8月に私どもみやぎ民話の会は、震災のど真ん中にありました南三陸町のホテルを会場にして「みやぎ民話の学校」というものを開きました。第7回目だったと思いますけれども、私どものこの「みやぎ民話の学校」というのは、私たちがお世話になって親しくさせていただいている語り手をお招きして参加者のみなさんに直接語り手から話を聞いていただく場にしたいという、そういう意図でやってまいりました学校なんですね。活字にしてお渡しにするという仕事もやってきましたけれども、活字では届かぬ、なんといってもそばにいてその声を聞いていただきたいという願いで「みやぎ民話の学校」というのを開いてまいりました。

2011年の8月にもそれを開く予定でいたんですけれども、3月にあの震災が起こって「今年は民話の学校は開けないんじゃないか」というふうな気持ちでみんなが落ち込んでおりましたけれども、そんなときにですね、今日ここに参加していただくことができなかった、亡くなった庄司アイさんがですね、私に

「先生、家屋敷も田んぼも形あるものは全部流されたんだけども気がついてみたら胸に民話があったのよ」

ってこういう言葉を私に送ってくださいました。そして、

「私はこれを命綱にしてこれからやってくつもりだから、よろしく頼む」

と、こんなふうな言葉を私にくださりました。

【民話を語るように「あの日」を語る】

私はその言葉を握りしめて、それを頼りにしながら、もう一度立ち上がってみんなと一緒に南三陸町を会場にしながら、海辺の民話の語り手たち―被災された民話の語り手たち6人の方に集まっていただいて、被災した「あの日」のことを語っていただきました。

被災された日からわずか5ヶ月経つか経たないかのときに、なかには奥様を亡くされたり、兄上を亡くされたりした方もあります。みなさん例外なく家屋敷、田んぼは全部流されておられました。そういう方を壇上にお上げして「その日を語ってくれ」なんて「そんなこと言って良いのか？」「酷いんじゃないか？」っていう声を耳に挟むこともありましたけれども、そういう声を超えて被災された語り手のみなさんが今言いました庄司アイさんのように「あの日を語ってもいいよ」「語るよ」と言って集まってくださって、そしてそれぞれの「あの日」を語っていただきました。男性が2名、女性が4名、みなさんそれぞれお歳でした。

そして奥様を亡くされた鈴木善雄さんという方は、民話のことで知り合ったというよりは、土地のことを非常によく知っておられる方で、この機会にぜひ出てきて流されてしまいましたけれども、閖上の土地のことを含めながら語っていただきたいと思って来ていただいた方でしたけれども、忘れることができませんが―奥様がこうやって手を振りながら波の向こうへ消えていった―そんな話を、実に淡々とまるで民話を語るように、ひとりひとりの方がしてくださったんですね。みんな言葉に言い尽くせない過酷な体験をなさっていたにも関わらず、みなさんはまるでそれを民話を語るように参加者の前で披露してくださいました。

あとでアンケートをとりましたもので参加者の声のなかで一番たくさんありましたのは、

「被災されたみなさんがまるで楽しい話でもするように「あの日」を語ってくださったのは驚きでした」

「まるで民話のように語られたことにびっくりしました」

ということが多かったんですね。

【自らの悲しみを濾過させて昇華された言葉を差し出す】

民話を語るっていうことは、自分の悲しみをそこにぶつけるってことではなくて、自分がいだいた悲しみをたくさん濾過させ、昇華させながら、いいものの形にして聞いてくれる人の前に静かに差し出すという姿が民話を語ることではないかと、語り手のみなさんから私は教わってまいりましたが、語り手のみなさんがあの日には淡々として、ときにはみんなを笑わせたりしながら、「あの日」を語ってくださったことが忘れられません。

たとえば、新地町から来てくださった小野トメヨさんは、やっぱり家屋敷全部流されなさったんですけれども、心配した息子さんが東京へトメヨさんを連れて行かれたんですね。トメヨさんはうちがどうなっているか心配で、なんべんも近所の方に電話をかけるんだそうです。

「もしもし、私のうちどうなったかしら？」

って聞くと、近所の方は、

「なーんにもありましぇん」

って言われるんだってゆんですね。

御存知のように新地町のあの辺り一帯は全部流されて何もありませんでした。

「でも、なにかあるでしょう？うちにあった大きな柿の木ぐらい残ってるんじゃないべか」

って聞いても、

「なーんにもありましぇん」

って言われる。

「何を聞いても『なーんにもありましぇん』『なーんにもありましぇん』って言われるのよー」

なんて、こういう話、まるで「和尚と小僧」の小僧が追いかけられながら口ずさむ繰り返しごとの唱えごとみたいに「なーんにもありましぇん」を繰り返し、健気にみんなの前で言ってくださったトメヨさんの姿を忘れることはできません。

そんなふうにしてみなさんがあの年の8月に自身の非常につらい体験をそれぞれ語っていただいたわけでした。それでそのとき私はその日の様子を非常に大切なものに思いまして、全部をこういうふうに文字に起こして記録として残させていただきました。これはこういう題をつけております。

『2011年3月11日 大地震 大津波を語り継ぐために ―声なきものの声を聞き、形なきものの形を刻む』

とこう書かせていただきました。

私の大切な友も海のむこうへ子供といっしょに流されておりました。私たちはその方たちに聞いてもらいたい気持ちいっぱいで、南三陸町海のそばの会場で、一心に被災された方たちの声を流させていただいておったわけです。

記録　寺嶋 大輔（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

◆ 「双葉町を襲った放射能からのがれて」

進行　小野 和子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

【福島の原発事故を語ること】

この記録（『2011年3月11日大地震 大津波を語り継ぐために』）のまとめとして、私は「はじめに」の言葉を書いているんですけれども、その言葉の最後にこういうふうに記しました。

最後にもう一言申し上げたいのは、津波は形あるものをみんな奪っていきましたが、一方、形あるものを、すべてそっくりそこに置いて、山も川も田んぼも畑も、牛小屋も鳥小屋も、家も仏壇もお墓も、みんなみんなそっくりそこに置いて、避難を余儀なくされた、福島原発の被害者の方々を忘れることはできません。このたびのわたしどもの「学校」ではそれに触れることができませんでした。けれども、あの原発事故がもたらした破壊を、どう語り継ぐのか。どうとらえて記録していくのか。三月十一日のもう一つの大きな問題です。そのことを胸に深く置きながら、これからの私どもの宿題として、胸に刻みながら、今回の民話の学校を終わらせていただきます。

というふうにして、福島のことを必ず語りますという約束をしながら、一言もここでは語れなかったことをもって、終りの言葉にさせていただきました。

【目黒とみ子さんとみやぎ民話の会】

　そうこうしておりましたときに、わたしどもの会にひょいと一人、「福島県の双葉町から来ました」という目黒とみ子さんという方が、私どもの会を訪ねてくださいました。そして、お聞きしますと、目黒さんが、私どもの会を訪ねてくださったのは、震災から二年後だったと思いますが、二年後のある日、ひょいと目黒とみ子さんが来られて、「私は双葉町の出身なんです」っておっしゃるんです。そして、「ここへ落ち着くまでに八回も転居したんですよ」と、その凄まじい転居の有様を淡々と語ってくださいました。私は、もう目黒さんをつかまえて、そしてなんとか、今度は目黒さんを通して、私どもが手を付けずにおりました、福島の原発の中で苦しんだ福島の方々の姿の一端を記録したいと思って、そして、目黒さんに語り、目黒さんと一緒に仕事を始めたわけです。目黒さん、どうぞ出て来てください。

【原発事故避難の記録集】

　そして、後でまた出てくると思うんですけれども、目黒さんにお聞きしたら、月に一回双葉町から宮城県に避難されている方々が集まって、いろんなお話をするっておっしゃるので、「じゃ、そこへ行って、なんか聞くことができますか」って言ったら、「いや、他所の人が聞いてきたんでは、みんな、なかなかよう話さないだろう」って心配されましたのね。「それじゃあ、目黒さん。聞いてください」って言って、目黒さんはご自分で、月に一度集まる双葉町の人びとに、お一人お一人に、今日までの様子を聞いて記録してくださったんです。

その記録を、『双葉町を襲った放射能から逃れて』というタイトルをつけまして、「私たちの証言集」として、双葉町の人がたがどんなに苦労して、あの日突然に家を追われたまま、一度も今日まで家に帰ることができないでおられるかという、その記録をここに残させていただきました。これは、目黒さんがいらっしゃらなければできない記録でしたが、目黒さんがそれを率先してやっていただいた有難さを忘れることはできないし、この記録は、特に私どもの乏しい財政の中でいつも本を出しますので、沢山も刷っていませんし、こんな薄っぺらなものではありますけれども、大事な私どもが残すべき財産の一つとして作った本でございます。

　以上ちょっと前置きが長くなりましたけれども、その目黒さんに、双葉町を逃れて、今日までどのように過ごされたかという、そのことを、目黒さんの体験として語っていただきたいと思います。どうぞ、よろしくお願いします。

◆ 「双葉町を襲った放射能からのがれて」

福島県双葉郡双葉町　目黒 とみ子（みやぎ民話の会会員）

【福島県双葉郡双葉町から宮城県へ】

　みなさん、こんにちは。私は、福島県双葉町に住んでいました目黒とみ子です。

双葉町にも地震が来ました。津波が来ました。そして、原発事故が起きました。東日本大震災、十年前のことです。「双葉町福島第一原発事故・放射能から逃れて」私の歩いた十年です。

　私は、宮城に来て、みやぎ民話の会に入会しました。

これは、仙台メディアテークのテレビ（記録映像）で見た話ですが、「第七回みやぎ民話の学校」は、震災の年、2011年8月21‐22日、被災の跡も生々しい南三陸のホテルで全国から二百人の参加者を迎えて開校しました。そのときの小野和子先生の挨拶に、「原発も震災だと思うのだけれども、私たちには探る手立てがありません」と話されていました。あのとき、私でもお役に立つことがあったらと思いました。

【放射能から避難した四十四名の証言集】

私たちは、双葉町から宮城県に避難した人たちで会を作っていました。双葉町の、宮城県の花で、「会」です。ひと月一回の集まりのとき、私はみなさんに話しました。「私は、双葉町から宮城県に避難したことを孫の代のために書き残したいと思います。みなさん協力してください。お願いします」みなさん、快く協力してくれました。

　双葉町の人は、北海道から沖縄まで避難をしています。いろいろな処で語られていると思っていました。でも、震災から五年目で書かれていたのは、宮城県だけでした。四十四名の貴重な証言が集まりました。『双葉町を襲った放射能から逃れて―私たちの証言集』四十四名です。でも、正しくはもう一人、四十五名でした。私は、その人の事情を知っていましたので、その人の聞き書きは最後と決め、始まりました。

【聞けなかったことと励まされた言葉】

でも、本当に最後になったとき、私はその人の聞き書きができませんでした。このようなとき、心を鬼にして、そこまでは分かりました。でも、誰にでも聞かれたくない、そっとしておいてほしい部分があるのではないかと思ったのです。奥さまを津波で亡くされ、大きな家も大きな納屋も津波で流され、たくさんの田畑も津波で駄目になったとき、いろいろ聞かれるのは嫌だろうと思いました。私に、その人の聞き書きはできませんでした。私にもっと聞く力、書く力、まとめる力、そして、語る力があったらと思いました。この聞き書きをまとめているとき、小野和子先生から素晴らしい言葉をいただきました。手紙です。

人生は、 どんな道に出会おうと、歩きつづけていくうちに、光に満たされるのではないかと思います。暗ければ暗いほど光が見えるのかもしれません。

　小野和子先生は、みやぎ民話の会の顧問の先生です。私は落ち込んでいたとき、頑張らなければと思いました。この言葉に励まされました。

【あの日の空に見た不思議な雲】

　私は、今日、みなさんにこの絵を見ていただきたくてここに居ます。この絵は、3月11日お昼近く。我が家の南の空で見た不思議な雲です。下は、我が家です。2011年3月11日午後2時46分震災ですから、震災三時間前の雲です。紺碧の空に、小さな雲が縦、横きちんとならんでいて、全体に四角でした。正しくは、上下に長方形でした。私が生れて初めて見た雲で、あの雲は何だろうと思いました。後で分かったことですが、この雲は、ひつじ雲。地震の前兆だそうです。失敗したと思うことは、あの雲の写真を撮らなかったことです。でも、描いた方がいいと教えてくださる方がいて、絵に描きました。

【避難の旅のはじまり】

　あの大揺れのとき、双葉町にも震度6強の地震が四分間続きました。あの大揺れのとき、私は津波が来るだろうと思いました。でも、双葉町にあった福島第一原発が、あのようにひどい状況になると思うことはありませんでした。　原発は絶対安全だという安全神話があったからです。

震災の次の日、3月12日朝、防災無線から「双葉町民は、全員川俣小学校に避難してください」と放送がありました。これが、私たちの避難の旅の始まりです。双葉町は、七千人弱の人口でした。

【避難者差別と子どもたち】

ある子どもさんが、ある学校のある教室に転校で入っていきました。その子どもさんを見た周りから「危険だ」と騒ぎ出したそうです。その子どもさんは、学校に行かなくなりました。登校拒否です。閉じこもりです。中学生の今、一番大事なときです。その子どもさんも大変です。でも、もっと大変なのは、その子どもを見ていなければいけないお母さんです。お母さんの辛い気持ちが、私にはよく分かります。私は後になって、この危険だと言われた子どもさんに会ったことがあります。にっこり笑ってくれて嬉しかったです。可愛い娘さんでした。その後、頑張って高校に行ったそうです。よかったと思いました。

東京の中学二年生。男の生徒さんから、証言集の感想文が届きました。Ｕくんは学校の授業で、本の感想文を書くことになり、『双葉町を襲った放射能から逃れて―わたしたちの証言集』を読み、書きました。

今、福島出身だからと差別したり、いじめたりする心ない人間の言動こそ人災だと思う。僕が今回偶然手にした証言集によって、今までどこか他人事だった被災地や避難者のことがぐっと身近に感じられたように、一人でも多くの人に生の声を聞いて欲しい。そして、次世代を担う僕たちが、自ら見聞し、何ができるのか、将来への教訓は何かをしっかりと考えなければならないのだ。

　この感想文は、2018年7月号双葉町政だよりに掲載し、遠く離れている住民に届けました。「見ました」、「読みました」との反響があり、嬉しかったです。役場担当者からは、「若い世代の希望の文章は、住民の心に届いたと思います」とお礼の言葉をいただきました。

　私は、昨年の3月11日、福島県いわき市のある小学校で、震災の話をしました。一年生から六年生まで、体育館の中でした。最後に、五年生の女の子が感想を話してくれたのですが、その五年生の女の子、途中で泣き出して話ができなくなってしまったんです。私は、どうしようと思いました。女の子を泣かせてしまったのは私なのですから。

私は、そこまで出て行って、泣いている女の子を抱きしめました。「ありがとね。握手しましょう」私にとっては、素晴らしい一日でした。双葉町に伝わっていた昔話「小太郎キツネ」も語りました。

【人災としての放射能災害を書き残す】

　私は、宮城県に来て、ある方に、「宮城は津波で大変でしたね」と話をすると、その人は、「津波は天災。原発事故は人災。比べることはできないのではないか」と話された方がいます。双葉町にあった福島第一原発事故は人災と判断されました。住民の気持ちは書き残さなければならないと思います。少しだけ、読ませていただきます。『双葉町を襲った放射能から逃れて―わたしたちの証言集』四十四名です。

◇《寒さに震えながらゴロ寝する》、八十代男性です。

避難生活では大変な苦労でした。阿武隈山地の廃校になった小学校の体育館で、寒さに震えながらゴロ寝をしました。こんなことは二度とご免です。その後、東京にいる息子のところに行きましたが、当分、双葉町へ帰れそうもないので、現在のところに引っ越しをしました。東京での生活は不便ですが、耐えるほかありません。八十一才のわたくしにとって、東京での避難生活は気の遠くなるような毎日です。双葉町へ帰れるまで、それまでなんとか生きたいと思いますが、明日をも知れないことを思うと心細いです。近くの集会所で、月に一回囲碁の打てるのが楽しみです。数学の本も読んでいます。こんなことで気をまぎらわせています。妻には、大変お世話になりながら毎日を送って居ます。

これは東京に避難した方から届いた手紙につづられていた言葉です。この手紙をもらって間もなく、この方は八十一歳で亡くなりました。

◇《まどか保育園の一番長いあの日から…》小さな子どもたちがどのように動いたかです。孫が通園していたまどか保育園通信便りからです。

三月十一日午後二時四十六分得体のしれない地響きとともに大地が揺れ始め一瞬にして混乱の渦に変わった。数分後、徐々に揺れもおさまり園児たちは、園庭に集合しました。お寺の壁が崩れて本堂が倒壊するような有様でした。そんな中近隣の多くの方が助けに来てくれました。そうするうち津波警報がなり、高台にある双葉北小学校へ避難することを決断しました。年長組の子どもが、年少組の子どもの手を引き、物が散乱した危険な道を必死に逃げる姿を見届け、そのあと小学校へいき徐々に子どもたちを保護者へ戻すことができました。園長が慌ただしく駆け込んできて、「原発の三キロメートル、もしくは一キロメートル圏内にいる人は避難するように」どのような理由なのか、瞬間的に理解することはできませんでした。避難する途中のラジオ放送から「地震と津波で受けた被害より、福島第一原発建屋の放射能が一斉に拡散するのではないか」という内容でした。何が起き一体どうなっているのか分かりませんでした。

◇ 証言集の最後に記させていただきました。

避難計画など非常時の対応にもっと国が力を入れるべきです。最悪の事態が起きうることを常に肝に銘じ、対策を怠らないことが、福島事故の最大の教訓です。

チャールズ・カストさん（米国・原子力規制委員会）

【10年が経って、写真を手がかりに】

私がこの震災で学んだことは、言葉の大切さです。私が双葉町からの避難者と知った近所の奥さんは、意地悪な言葉を発しました。いじめられた子供の気持ちが分かりました。

私が住んでいたところは、今、雑草が生い茂り、イノシシが増え、家は数年後に取り壊しだそうです。双葉町に住民は住んではいません。

証言集から5年、震災から10年が過ぎました。10年でコロナに負けた放射能です。証言集の先にあったもの。それは、話を分かりやすくするための写真でした。

写真を見てください。双葉町の標語〈原子力明るい未来のエネルギー〉でした。この文字、現在は撤去されてありません。

【川俣町へ避難、原発の水素爆発】

3月12日の朝、震災の次の日、防災無線から、「双葉町民は全員川俣小学校に避難してください」と放送がありました。全町避難です。情報不足で混乱。逃げろ、西へ、川俣へ。道路は渋滞し、なかなか進まない。ガソリンもない中、見えない恐怖が迫る。私は県外へ、親戚のところへ。家族が、友人が、散り散りに避難していく。

川俣の避難所に着きました。辿り着いた川俣に複数の避難所に入り、「食料は？」「飲み物は？」川俣町民が懸命の炊き出し。有難い。灯油が届きほっとする。

原発が爆発する。決断のときが近づく。そして、これ（写真）が出てきます。東京電力福島第一原発で事故。津波で全電源喪失。平成23年3月12日午後3時36分。1号機水素爆発。続いて3号機、2号機、4号機爆発。事故評価、最悪のレベル7。日本で最初の原発事故です。当時、国内には54基の原発がありました。

そのときの様子をある人は、「体で風圧を感じ、音とは言えない衝撃音。雪のような白いものが降ってきました。ただ驚くばかりでした」別な人は、「我が故郷に龍立ち上り　そして誰も居なくなった」と表現した人がいます。あの日から、みなさんどうしているでしょうか？

【埼玉県へ避難、天皇皇后両陛下の慰問】

3月19日、双葉町は役場機能も含めて埼玉県スーパーアリーナへ。バス40台、1,200人で向かいました。福島県外へ出たのは、双葉町だけでした。お世話になった川俣町での支援に心から感謝しました。スーパーアリーナは、期限付きでしたから、埼玉県加須市旧騎西高校へ。各教室に分散して生活が始まりました。

「眠れますか？」「お疲れではありませんか？」23年4月4日。天皇皇后両陛下の優しいお言葉に子どもたちの表情が和らぐ。故郷から200キロ。原発から遠くへ。辿り着いたのは旧騎西高校だった。「先が見えなくて辛い。これからどうしたらいいのか…」と話した町民に、天皇陛下は「良い方向になると、いいですね」平成の天皇陛下です。平成の皇后さまです。8日、入学したばかりでピンクのランドセルを背負っていた少女は、皇后さまに、「楽しい学校生活にしてね」と話しかけられ、はにかんでいた。井戸川町長は、「町民が前向きな気持ちになれました」と感謝した。

【いわき市へもどる、封鎖された町】

双葉町は、福島県いわき市に戻ってきました。これは、役場の開所式の様子です。あの日から、2年3か月が過ぎていました。お世話になった埼玉県加須市。そして、川俣町への感謝を忘れずにです。

双葉町、そして近隣の町村には今、放射能で汚れた土を入れた黒い大きなビニール袋が積まれています。私たち、個人の力ではどうすることもできない、封鎖されたゲートです。平成23年4月22日午前零時。双葉町は封鎖となりました。

【海外にどう伝えられたか】

この後は、これだけ大きかった東日本大震災が、日本から外国にどのように伝わったのか、お二人の方の話を聞いてください。

一人目は、内田ボブさんです。内田ボブさんは、ミュージシャンの方で、震災の時はオーストラリアに居ました。原発に関心のある方でしたので、原発の燃料となっているウランがどのように輸入されているのか知りたいと思い、息子さんとオーストラリアに出かけていきました。砂漠を移動中、オアシスのようなところにドライブインがありました。土地の人が呼んでいるピンクハウスで休んでいると、日本人かと聞かれたのでそうだと答えると、テレビを見るように言われました。日付は3月15日になっていました。テレビから津波の様子や原発が爆発した様子が映されていたので、これは大変だと思い、宮城の友人に電話をしたのですが繋がりません。心配しながら進みました。途中、住民による日本に向けた募金活動などが行われていました。日本のことが聞きたいと言われ話ができたことが嬉しかったです。歌も歌いました。

内田ボブさんが、オーストラリアから、インドネシアバリ島に渡るとき、アボリジニからメッセージを託されました。福島の人に伝えてください。それはとても貴重な話でした。アボリジニ共同声明ということで、

福島の人は、今回の爆発事故で大変な思いをしていると思います。原発で燃やされているウランは、私たちの大地から採られたものです。不幸の責任を感じています。遺憾に思っています。核の脅威から解放されるまで、私たちは、闘い続けることを誓います。

この声明文でした。この声明文を文字化したものを、私はボブさんに送りました。それを見て、内田ボブさんは、涙が出てきたそうです。この声明文、今、福島県双葉町にあります伝承館で保管となっています。

　二人目は、立命館大学の村本先生です。村本先生は、震災のときから、学生さんと一緒に青森、岩手、宮城、福島を訪ねて、被災者に寄り添い、話を聞いたことを本として出されました。『周辺からの記憶　三・一一の証人となった十年』無関心でいたくない、他人事にしたくない　東日本大震災を周辺から記憶し、記録してきた十年間の物語。村本邦子。

二〇一九年九月、チェルノブイリ原発事故があったウクライナに行くため、アムステルダム経由でキエフに飛んだ。ウクライナ国立チェルノブイリミュージアムは、事故地から約100キロ離れたキエフ市の中心部に位置する。アクセスは良いが、大きな看板があるわけではなく、元々は消防署だったという博物館らしくない外観なので、注意しなければそれとは分かりにくい。受付を済ませて展示室に足を踏み入れると、最初に目に飛び込んできたのは、なんと福島原発事故の展示だった。ウクライナ語と日本語で書かれたメッセージが掲示されていた。地震、津波被害の新聞記事、双葉町の「原子力明るい未来のエネルギー」の看板や白い防護服を着た作業員、避難家族と被災した自宅や仮設住宅の写真、原発反対デモの写真と関連の新聞記事、原発サイト、甲状腺検査を受ける子ども、積み上げられた除染土、柿や桃など福島の農産物を含む風景、津波後の光景と鯉のぼりの写真などが展示されていた。全体としては、原発事故の悲惨さ、過酷さを訴える内容になっている。二階の展示室に入ると、ウクライナチェルノブイリ原発事故の展示だった。25年前の1986年4月26日午後1時23分、4号炉で事故は起きた。白いホースを持った消防士と作業員。等身大のオブジェの人形と丸い時計。その他たくさんの説明するものが展示されていた。（『周辺からの記憶』［国書刊行会 2021］から抄録要約）

私は、ウクライナまで行くことはできません、この本で知ることができました。

【四つの問いと答え】

ある方から、質問がありました。「双葉町に一度は帰られましたか？」「十年経過した今の気持ちは？」「故郷への気持ちの変化は？」「語りは支えになっていますか？」。

◇〈双葉町に一度は帰られましたか？〉

原発事故を世界に発信するアーカイブスですが、双葉町に出来ました。名称は「伝承館」です。語り部をしたので出かけていきました。近くにあった知り合いの家に寄ってみました。「どうしてこんなことに」。家は近いうちに取り壊しだそうです。我が家はもっと大変です。

◇〈十年経過した今の気持ちは？〉

　津波さえ来なかったらと思います。でも、子どもたちはもっと大変ですから、ピンチはチャンスと考え前に進むしかないと思います。いじめられる子どもの代弁をしなければと思います。

◇〈故郷への気持ちの変化は？〉

故郷での言葉。夢、幻だったのかと懐かしくもありますが、戻れないことをしっかりと考え、それぞれの土地で頑張るしかないと思います。

◇〈語りは支えになっていますか？〉

家を出るとき、二、三日で戻れると思ったので何も持ちませんでした。でも、その道は、二度と戻ることのできない道だったのです。何も持たなかったのに、たった一つだけ、持ち出したものがありました。双葉町に伝わっていた昔話「小太郎ぎつね」です。避難中お世話になったお礼に「小太郎ぎつね」を語りました。「東北の民話を生で聞いたのは初めてです」「よかったです」「感動しました」と喜ばれましたので、これがご縁でみやぎ民話の会に入会しました。困ったときに助けてくれたのは語りですので、支えになっています。

　聞いていただいてありがとうございました。いろいろなところで、たくさんの方にお世話になりました。ありがとうございました。

小野―目黒さん、ありがとうございました。語りにくい数々のことを率直にみなさんの前で、こうして披露していただけたことを、とても大きな財産として、お一人お一人もち帰っていただきたいと思います。

出典 『私たちの証言集 双葉町を襲った放射能から逃れて』目黒とみ子 聞き書き（双萩会 2016）

記録　加藤 恵子（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

◆ 「閖上　津波に消えた町のむかしの暮らし」

進行　小野 和子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

【早坂泰子さんとみやぎ民話の会】

次に、ご出身で、すっかり流されてしまったについて語っていただく予定でありました早坂泰子さんについて、ちょっと話をさせていただきますと、泰子さんが民話に関心を持って私の家を訪ねて来られた時に、すでに彼女は五十歳を過ぎておられました。

「今から皆さんと一緒に民話の勉強をしたいんですけども」と言われましたが、その理由を聞いてびっくりいたしました。最愛の息子さんが山で遭難されて亡くなって、その息子さんの本棚に民話の本があり、それから、愛読されていた本に『遠野物語』があったというのです。彼女は、「民話について何も知らなかったけれども、息子が愛した民話をもっと知りたいと思うので」と言って、私たちの会に五十歳を過ぎてから入ってきてくださいました。

そして、一緒にあちこち歩きました。歩くって言ってもなかなか大変なことなんですけれども、それにもめげないで早坂さんも歩き続けて、まで来ました。

【長者原のおばあちゃんの語りを聞き記録する】

それで、そうやっておられるうちに早坂さん自身も山へ登られる登山者でいらしたんですね、「山形のからに登る時に、の登山宿にいたあのばあちゃん、もしかして民話を語るかもしれない」って言うので。彼女は、その山のの登山宿のおばあちゃんに連絡を取ったら、「ああいいよ、語るよ」って言われたというので。私を誘ってくださったので、二人で、そうですね、およそ三年ぐらいかけてそのおばあちゃんの元へ通って、おばあちゃんから民話を聞きました。

素晴らしい語り手で、八十話くらいの長い話ばかりなんですよ。八十話くらいの話を聞きまして、それをのちに早坂さんと私は、このような一冊の本にさせていただきました。『』（佐藤とよい語り・小野和子編 評論社 1992）っていうので、これがで話を聞いたばばさんですけれども。

その早坂さんが、ご自身の出身のが、この度の3月11日の津波にわれてしまったことを、非常に悲しく思われて書かれた文章が、私の元へも届けられました。

本当は早坂さんに読んでいただきたい所ですが、代わって私どもの会の倉林惠子さんに、早坂さんのふる里への思いを綴った文章を読んでいただきたいと思います。どうぞ、お願いします。

◆ 「閖上　津波に消えた町のむかしの暮らし」

宮城県名取市閖上　早坂 泰子（みやぎ民話の会会員）

朗読　倉林 惠子（みやぎ民話の会会員）

2011年3月に東北地方を襲った大災害から、もう10年もの年月が過ぎました。

　それは、あまりにも大きな災害で、広範囲に渡って多くの犠牲者と共に町や村を消し去り、人々に癒えることのない傷を残しました。

　その中の小さな町「閖上」、関心を持たなければ、閖上という辞書にも出てこない当て字なので、知らない人が多かったと思うのですが、この度の災害による被害の大きさ、町全体が流されたという大きな被災、によって日本中の人々の意識の中にきざまれて、一躍その名が知られるようになりました。

　この小さな町、閖上が私のふる里です。

ふる里は特に意識しなくても訪れればいつもそこに変わらずにありました。あるのがあたりまえと思っていました。それが、あとかたもなく根こそぎ消えてしまったのでした。

しかし、その時から、私の中のふる里「閖上」は心の中にくっきりと姿を現し、どんな小さな裏道も、町角も、人々の顔もくり返し現れるようになりました。

　何故、こんなにもこだわるのだろうと不思議でした。でも、考えてみると、意識しなくてもこの環境は私自身の感性を育て、いろんな意味で今の私に影響を与えているのだとしみじみ思います。

　宮城県には全国に知られた大きな港町がたくさんあります。気仙沼、女川、石巻、塩釜など、大きな船が出入りして水揚げも多く、各地に魚が運ばれて行きました。

　閖上は小さな町です。仙台という都会のすぐ隣のような近さに位置しているのに、つい最近まで本当の田舎町でした。

　名取駅（当時は増田駅）から東に真っすぐな道を６㎞ほど海に向かって進んだところにあります。

　特徴的なのは、農村地帯（丘区と言っていましたが）それと町の町区とに、くっきり分かれていたことです。海では魚が獲れ、丘区の地帯では米や野菜が生産されて、戦中も戦後も食糧難で不自由することはなく、人々は豊かでなくてもらかで伸び伸びよく暮らしていました。

　そして、町区は商店や医院、銀行など何でもそろっていて、人口密度が高く、閖上の人口の80％にあたる人が町区に住んでいました。

　しかし、なんと言ってもの町なのでほとんどの人がとつながりのある仕事についていました。

　名取川をはさんで、北側は、、六郷（現在は仙台市）などで、そのほか内陸の、、などほとんどの地域の人の生活圏が閖上とつながっていたので、当時の閖上の町は人の出入りが多く、活気にれて盛んでした。

閖上の海は湾とちがってに面しています。港も整備されていなかったので、名取川の河口は土砂が多く、たえず土砂が動いて安定しないのです。水深も浅くて、大きな船が入港しにくく、土地の漁船も危険をともない、入港の際にたびたび遭難事故があり、その度に町は大騒ぎになりました。そのため、漁に出る船は小さく20トンから30トンだったので、近海のが多く、鮮度のよい魚が揚がり、仙台をはじめの人たちの生活を潤しました。それでも小さな船でに出るのですから常に危険と隣り合わせで、たちにはがけの仕事でした。

　船に乗るたちはすると、市場に出せない雑多な魚を分けて、**と**言って家に持ち帰ります。奥さんたちは夜なべしてさまざまに手を加えてすぐに食卓に出せるようにして仙台に運びました。

　閖上の女性は働き者で、夜、加工した魚をって３時か４時に提灯をつけてあんどん松の下を通り、仙台まで歩いて行くんです。閖上の**イサバ**として有名でした。それぞれにお得意さんがあって午前中には仕事を終えて帰ってきます。昔を知る仙台の人は閖上というと「あ、焼きがれいのおいしいとこだよね」ってよく知っています。

**イサバ**のおばさんたちは、仕事がら男まさりで声も大きく、言葉も荒っぽかったので、町以外の人からは怖いといって敬遠されがちでした。人も町もよそ行きの顔を持たず、ずけずけと物を言い裏表なく、その意味では解りやすい人たちです。

　飾りけのないところ、垢ぬけない田舎っぽさ、個性的な町でした。私はそんな閖上の町も人も大好きでした。

　閖上で忘れられないのはさんのことです。さんはの船頭でした。帰港すると必ず珍しい魚を持ってきてくれました。たらばがに（当時は底引き網に立派なかにが入ったのです）、ふぐ、うなぎなどいろいろありました。

　そして、どんな魚でも手際よくさばいて作ってくれました。私は幼なかったので、魚をさばくところが珍しく、さんのにくっついて歩いて、見ていたんです。資格などなくても、ふぐを作ったし、うなぎを裂いて七輪に網をのせて焼いたりしました。

　さんには独り息子がいたんですが、今回の震災で自動車ごと津波にさらわれて奥さんと一緒に亡くなりました。

　なんと言っても、閖上の町をとりまく景色は私の一番の自慢です。広々としてどこまでも続く砂浜の美しさ、海が荒いので砂が細かく指の間からさらさらとこぼれ落ちます。

そして白く泡立つ波打ち際が、目の届く限りどこまでも続いています。

昭和の文部省唱歌に「われは海の子」という歌があります。その二番に

生まれて潮に　ゆあみして

を子守りの　歌と聞き

千里寄せくる　海の気を

吸いてわらべと　なりにけり

まさに閖上の子どもたちはこのようにして元気に育ちました。

の海と町（住宅）の間には、、があってここは波もなく静かで、釣り人が多く子どもたちは貝とりなどを楽しみました。

更に町の中を通るがあって、両側の道は裏道という感じで人々の生活の匂いが溢れている通りでした。そして、中心を通る表通りの北側はゆうゆうと海に注ぐ名取川があります。

昔は対岸のとの間に橋がなく渡し舟がのどかに行き来していました。

川岸にはに行く船や小さな**ば**と呼ばれる小舟などがいであります。

閖上の町はどこを向いても水だらけです。そして、町の裏手にはが広がっています。小川が流れて小さな水車がまわって、どじょうやめだかが泳いでいました。更に目を転じると遠くにとそれに続く、泉ヶ岳と山々が雄大な姿をかまえています。

まさに、海あり、川あり、あり、山ありと、田舎としてのすべてのものがそろっているところです。文字や写真では表せないがありました。匂い、風、空気など説明しきれないものがあります。

このような、少し前の町の姿を知る人は少なくなりました。現在は名取市に合併されて、町の中心はになりました。を切りくずした沢山の住宅が建設されました。

これからは、昔の閖上を知る人は誰もいない、私だけのふる里になりました。

復興とはこういうことなのでしょう。立派な舗装道路が何本もできて、住所は何丁目何番地に変わりました。町も町も町ももなくなりました。閖上の町はすっかり変わりました。

な土地なので空の広さが印象的です。

復興していく町はどこも同じで個性が感じられません。立派な道路、マンション、学校などみなコンクリートばかりで親しみが持てません。次第に都会化していくふる里の姿、生活は便利で暮らしやすくなるでしょう。

あの小さな商店が姿を消して大型のスーパーやコンビニができて、どこの町も同じ姿になっていくのだなぁとしみじみ思います。

昔と変わらないのは、海、、と名取川だけになりました。

私はこのも私だけのふる里を心の中に大切に持ち続けたいと思います。

最後に「詩」をひとつ。

海の見える町

ぬれた砂に

指であなたの名前を書いた

波が寄せては消していくけど

なんどもなんども

くり返し書いた

かなしくなったら

ここに立ってください

風にのってわたしは

あなたのもとへ行くでしょう

思い出したら、

大きな声で呼んでください

打ち寄せる波に

わたしの声が聞こえるでしょう

わたしは

海に生きています

あなたは

海の見えるこの町を

離れないでください

小野―

倉林さん、ありがとうございました。

それから、これを書いてくださった早坂さんは、先ほども言いましたように、ちょっとのためにここに来ていただくことはできませんでしたが、早坂さんのふる里への深い思いが、今の文章とそれから最後の詩にされていたと思います。しみじみと読んでいただいた倉林さんの朗読に感謝しながら、早坂さんの文章を終わりにさせていただきたいと思います。

参照　小野和子・河井隆博・早坂泰子『「閖上」 津波で消えた町のむかしの暮らし』（みやぎ民話の会 2014）

記録　倉林 恵子（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

◆ 「小さな町を呑み込んだ巨大津波」

進行・朗読　小野 和子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

宮城県亘理郡山元町　庄司 アイ（みやぎ民話の会会員・やまもと民話の会会員）

小野―

【鉛筆と紙を手に避難所で聞き書き】

　最後にもうひとかた、庄司アイさんの書かれたものをちょっと読ませていただきたいと思います。少し時間も押してきましたので、長いものは読めないんですけれども、庄司アイさんについてのことをちょっと話をさせていただきながら、一つの文章だけ読ませていただきたいと思います。

　アイさんはですね、さっきも申しましたが、家屋敷、田んぼ全部流されなさったんですけれども、そして、娘さんの嫁入り先に身を寄せておられたんですけれども、すぐにですね、鉛筆と紙を持って、避難所に行って、近所隣の方たち、みんな避難所に避難しておられたわけですけれども、そのお一人お一人にあの日のことを聞いて、語ってもらって、それを鉛筆で書いておられるんです。ほんとにびっくりいたしました。テープレコーダーもまだ何もないのに、鉛筆と紙だけを持って、しかもそれも調達するのが大変だったと後で聞きましたが、鉛筆と紙だけを持って避難所へ行って、そして、顔見知りのあの方、この方の下へ「どうでしたか」「どうでしたか」と聞いて、そのお一人お一人の「あの日」を記録されました。そして、それが積もり積もってですね、このような冊子「語りつぐ・証言　小さな町を呑みこんだ巨大津波」このようなものを三冊までになるくらい、アイさんは聞き書きを続けられた方なんです。で、その聞き書きされたものの中に自身のあの日のことも書いておられるので、そこを私は読ませていただきたいと思います。

民話は残った

庄司 アイ

　犬って臆病なんですね。生後四か月のニッキ（柴犬・オス）が、おりをやぶって飛び出し、キャン、キャンってないて私のいた居間を、足ぃすべらせ、すべらせ走り狂ってました。

　まんぜろく、まんぜろくって、大声で呪文を唱えたのにも、効き目なく大きくて長い地震でした。

　私は「こんなに大きな地震だもの、津波くるネッ」って、夫に声をかけても、動転してしまった夫からは返事もない。そんで、

「テレビを消せ」って、声が大きい。

　私は「情報がわからないでしょう」って、ラジオを居間に持ってきてボリュームをあげた。

　かな恵（孫娘・中二）は、友達の荒さん宅に行ってて不在。その時、私の心は孫を待つことだった。荒さんは、必ず車で送ってくれる方でしたし、行き違いのことも頭をよぎったから。

…（中略）…

　かな恵はニッキを抱き、二人で車を見送りに前に出たら東隣の方で、何かあったか気がかりな車が見えて、心配になったのです。が、一度中に入ってからと思って玄関入口に上がった時、

「ばあちゃん津波－っ、早く早く、二階にーっ」

って、駆け込んできたのです。一瞬ふりかえると、一キロ前方、自動車学校の西の耕土を、もくもくと黒い瓦礫の塊が西に寄せてきたんです。「津波・津波って、海の水がくるんだよ」って思いつつも「早く、早く」の声で、夫も不審気に「なーに―っ」って、私に続いて階段を上がりました。夫は振り返ったのでしょう、「ああっ、二階まで水っ」と大声だしました。

　二階に一、二秒早く上がったかな恵の目に入ったもの、それは、隣（西南）の横山さん家族の乗った車だったのです。

「もう、横山さんち駄目だーっ」

って、悲嘆一言。

二階に水が入ってすぐ、ベランダに出た。

「家が、動いてる、動いてる」と、私が声を出しました。

その後、三人と一匹、…無言、交わす言葉もなく漂流…。

動く寸前に私が見たのは、前の雑賀さん家（平屋）の屋根はすっぽり瓦礫の中でグスだけ「線」に見えてたこと。

家は西に流れ、岩佐さんと横山さんの間を通りましたが、この時、家は回転して北向きでした。

岩佐さんの息子の睦雄さんが、二階の窓から私たちを見ていました。すれすれに流れたんですが、睦雄さんが私の目より一メートルは高く、私が見上げたかっこうでした。

「岩佐さんの家は大丈夫なんだ」と思いました。

　私は心に何の曇りもなかった。

「おしまいのときだ」と。

そして、「私の人生、悔いはない。晩年は民話などやってて、いい人生だった」

そういえば、「お諏訪さまの大杉の話」「小鯨の話」「舟越地蔵さまの話」、大昔の人が伝えた「大津波」の話だったなあ。民話を語ってくれた先人たちは「民話の一つ、ひとつに根拠がある」っておっしゃってたことも思いだしました。

　家はすぐ、戸花山の麓、そして山沿いを北に流れた。でもおかしい。いつも通る景色がない。麓には、家が続いていたはずが一軒もない。そのうち、竹林、孟宗の竹林が見えた。

　やっぱり、ここは戸花山。戸花を過ぎても北へ流れ赤坂といわれているあたりの時、ずっと上、西の方に数軒の家が見えた。

「あっ、あの奥の方には、宮城病院がある。息子たちは大丈夫なんだ。よかった」

と思った時、

「あれっ、もしかして、これはノアの箱舟」…。

　でも、でも、私はノアのような正直者でなかったなあ、だから神様は助けてくれない。でも、本当に不思議なんです。先祖さまや兄弟、友人、たくさんの方が私に来て付いてくれている不思議な雰囲気を感じていたのです。

　そして、さっき、かな恵を送ってくれた荒さんの家族、駅前の弟家族に思いをめぐらしていました。「助かってほしい」と。

　家は傾きながら、東にぐんぐんと流れました。私の目に清掃センターの建物と百メートルの煙突がちらっと見えて、間もなく家は南向きに前のめりになって、止まったのです。どんっと止まったのです。流れていた家が。

やっと夫と私と孫は目をあわせました。ベランダにも水があがっていました。視界のあるかぎり瓦礫の海で立木もなければ家もない。流されて傾いた家が近くに二軒ありました。

　水が増して膝までになったと時、ビール箱二つをみつけて台にしたんですが、それでも膝までの水で、かな恵が屋根に上ろうと、手を屋根に掛けた時、夫は、

「三人束になって、一緒に」と、なだめていました。犬のニッキは、普段とってもうるさくてじっとしてない、ないてばかりの犬なんですが、夫にだかれても、もう、沈黙の犬になっていました。

　私は、柵につかまってた手を伸べて、分厚い柱風の材木をえいっと引き寄せました。台にしようと思ったんですが、五寸釘が三本出てましたので、夫は「あぶない」って使ってくれません。竿のようなものも三本引き寄せました。水の中から私は引き寄せたのです。

　水が引いているようで、部屋の水が膝ぐらいになった時、夫は中の様子を見てくると入りました。「奥のかな恵の部屋が、水の引きがいい。二階五つの部屋がくっついてて、窓もしっかり閉まっている」とのこと。

　夫は「今晩の休む場所を用意する」といって、また中に入りました。夫はすごい人だと思った。明日に希望をもって行動してるんです。机や箱物を集め高く積んで、戸板を置いて、多少は濡れているけど、布団も用意しました。

夫が「明るいうちに、中に入ろう」と言った時、かな恵が、

「ガス臭いっ」

って、叫びました。なるほど、プロパンガスの臭いです。すごい臭いです。大変なことになったと、夫と中を見回したら、二階の廊下に大型のボンベが横たおしであったのです。

　そこはいっぱいの物が入ってて踏み場がない。なんとか乗り越えて、元栓が壁側なので、やっとのこと手を伸べたら、全開でしたのでしっかり閉めました。「オール電化の我が家のはず、息子たちはこのガスをいつ入れて、何に使ってたのでしょう」と思って戻りましたが、夫も同じ思いだったようです。しばらくして、臭いも消え、五時ごろと思う。私たちは、夫のつくった戸板の上に移りました。

　私が独り言「ガス、何に使ってたのかなぁ」

　すると、かな恵、

「ガスなんて、使ってない」

と。…あれは、後ろの壁を破って入りこんだものだったんです。それにしても、尻から入ってくれてよかった。頭から入ったら、栓が壊れてガスが噴き出したでしょう。あの大穴から水が出入りしてたのもうなづけた。どろんこのガレキだったから。

　かな恵は、ペンほどの電灯をみつけてくれたし、夜中寒さがきびしくなった時は、電灯で照らしてカイロを五つ見つけて、夫と私に二つずつと自分は一つ、これもありがたかった。

　夫は腕時計を掛けていたので、時間の確認ができ、月あかりで、外の様子がわかった。水はまだ、だっぷりあった。

　夫は「ここは、どこだ」とせっかちに聞く。「焼却炉の南」と答えるが、納得なし。

（後でわかったことは、家が動いた時から流されていた時間帯は、夫は全く何も見えてないのです。空白で意識が失せていたというのです。私は、鮮明にその光景が映像になって残っているんですが）

　私は声には出さないんですが、全身をこめて、念仏を唱えていました。

夫は「声を出せ」「何かしゃべれ」「眠るな」…と夜通し私たちに声をかけてくれていました。

　少しずつ明るくなって、夫に、

「昨日、瓦礫から引き寄せた、棒を持ってきて。なるべく長いのを」

と頼みましたら、本物の物干し竿があったと、長いのを拾ってきて部屋に入れてくれました。かな恵の赤いバスタオルがあったので、紐をさがして竿にくくりつけ旗にしました。

　夜明けと共に、夫とかな恵は旗をふりました。バスタオルの旗を振りました。

　私は、立ち上がれず、北の窓を開けて、棒にシャツを結わえて振りました。

　窓から下を見たら、常磐線の線路が西におし流され、そこに瓦礫がたまり、我が家はそこで止められていたのです。焼却炉もすぐ北に見えました。

　ヘリコプターが飛び、八時ごろと思うが、山下駅方面からの救出がはじまりました。

　十時ごろだったと思います。

　ベランダの二人の会話がはずむように聞こえ、間もなく、

「早くベランダに出て顔を出せ」というのです。克哉（長男）の姿が見えるというのです。

　南方より瓦礫を越えてくる息子を確認しました。間もなく英一（娘の夫）さんの姿を確認、もう一人、私の二軒後ろの寺島さんでした。寺島さんは、お母さんが行方知れずでさがしておられたとのこと。寺島さんも私たちの脱出を最後まで手伝ってくださいました。

　ベランダ（南）側は海なので、北の窓からの脱出。都合の良いことに、瓦礫の中から梯子をみつけて窓にかけてくれたのです。

　山のような瓦礫の上に折れ曲がった梯子がかけられました。

　英一さんの長靴を順番に借りて、寺島さんと息子に支えられ、かな恵、私、夫の順に救出されました。瓦礫を下りて、常磐線の線路を二十メートル程歩きました。

　息子達は、津波警報が続いていることを懸念しながらの瓦礫越えに、慎重と冒険、危機感が迫っていたようです。でも、私達はこうして助かったのでした。

…（中略）…

　皆さんも被災者なのに、私一人が被災者のようにお励ましいただきました。みなさんの優しさに感激しきりでした。

　再起への力は、民話からもらいました。

　民話はやさしい

　民話は熱い

　民話は強い

　尚、荒さんのところも弟の家族も無事、かえって、避難所をめぐって私どもを心配してくれておられたのでした。

（英一さんのあと語り）

　十二日、津波の情報がないまま、様子を見に国道に下がった。全く予期せぬ事態に唖然。見渡す限り瓦礫の海。戸花に下がって絶望だった。避難所をめぐるが名前がない。また、戸花に向いて、克哉に会った。やっと、太陽光発電のある屋根を見つけ瓦礫を越えはじめた。その時、赤い旗があるのを確認した。「誰かがいる」とはずみがついて頑張ることができた。

　とりとめのない前後もめちゃめちゃなこの私の避難の記録です。読んで頂いてありがとうございました。以上です。

　庄司アイさんは、先にも言いましたように、この後すぐに、第二集、第三集を出されて、自分だけではなくて、多くの人からの聞き書きを記録してくださいました。これは本当に大変な素晴らしい仕事として、庄司さんの生涯を飾る物になったと思っております。

　こういうときに「民話があってよかった」という言葉がふっと出てきているというのも庄司さんらしいし、同じく一緒に民話をやってきた者として、民話が一つの支えになって庄司さんが流されながら、「民話、民話、民話……」と口ずさんでおられたことも後で聞きましたので、民話というものの力がまた改めて確認することができた一場面でもありました。

ちょっととりとめの無いことになりましたが、一番はじめの目黒さんの話、それから閖上に心からの愛情を傾けた早坂泰子さんの話、それから自身が流され流される経験をしながら、後につながる仕事を残してくださった庄司アイさんの流された記録、これらを皆さんの前に披露させていただき、第一部を終わらせていただきたいと思います。

　聞きにくいところがたくさんあったと思いますけれども、ご清聴ありがとうございました。

小田嶋―ありがとうございました。これで第一部を終わるんですけども、第一部を受けまして感想、意見などありましたら、ぜひどなたか出していただければと思いますが、いかがでしょうか。なんか質問でもありましたら、出していただいてもいいですが。

　じゃあ、第二部もありますので、第二部が終わったあとにまた改めて、意見などございましたら、その時にでも出していただければと思います。

　ひとまず、これで第一部前半は終了しましたので、ここで休憩に入りたいと思います。休憩は15分いただくことにしますので、15分後にまたお集まりください。よろしくお願いします。

飯川―第一部お疲れ様でした。それでは再開を14時55分頃とさせていただきます。なお、会場の後方で書籍の販売も行っております。終了後でも結構ですので、混雑も予想されますので、休憩時間にご利用ください。それでは、再開時刻は14時55分から再開いたします。

参照 やまもと民話の会編著『小さな町を呑み込んだ巨大津波』（小学館 2013）

記録　島津 信子（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

◆ 第二部 祖先はどのように災害を語ってきたか

進行　小田嶋 利江（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

【語り伝えられた災害の話】

それではですね、これから第二部「祖先はどのように災害を語ってきたか」という内容に入りたいと思います。最初に紹介しましたように、第一部はもっぱらこの前の大地震、大津波のことについての記録の営みを語っていただきましたけれども、第二部はもう少し時間も空間も広げまして、民話のなかで先祖の人たちが災害の体験や記憶を踏まえながら、どんなお話や物語を語り継いできたのかということをいくつか紹介していきたいと思います。

最初の資料に出ておりますように、そのテーマについて、いくつかお話を拾ううえであげてみました。地震、津波、飢饉、疫病、水害、とあげてあります。これは、ふたつずつ関連する内容になっています。最初の地震、津波、そして飢饉、疫病、これは地震があれば津波が襲う、それから飢饉のときには疫病が流行るということで、ふたつずつセットになって我々が苦難を受けてきた災害ですよね。そして最後の水害、干魃、これは人が生きていくうえでどうしても必要な、最も必要な水について、それが多かったり少なかったりすることによって、我々が苦労してきたことについてのお話なんですね。

ですからこれを順番に、わたしたちが宮城県内でいろいろ聞いてきた話、あるいは宮城県内で紹介された話のなかからいろいろ選んで、みなさんに我々の仲間が語ってみたいと思います。資料にその出典からあげてありますけれども、語りとしてみなさんに聞いていただきたいと思いますので、できれば語り手の声を聞く形で、文字から離れて聞いていただければうれしいなあと思っております。

【地震の話】

では最初に、順番でいきますと地震についてのお話なんですけども、じつは地震の話ってなかなかないんですよね。地震が物語になっているっていうのは。そのなかでもひじょうに貴重な話、「井戸に落ちた地震」というのを島津信子さんに語っていただきます。よろしくお願いします。

《地震》

(１) 井戸に落ちた地震

語り 島津 信子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

むがぁす、むがす。

　あるところにっこがいたんだど。そのっこ

〈なんとがすて、海のむこうさ行ってみでぇ〉

と思ってやぁ、舟いで出かけていったんだど。

　家を出る、やんから、

「（子ども）、餓鬼。これ、遠ぐさ行くのだから、こいづ持って行け。大事なだけ出すてみろよ」

って、形見の品物をもらって行ったんだど。

　そうすて、海を越えて、向こうの島に着いたれば、山の中に一軒家があって、そごさ、

「一晩、泊めでけらいん」

って、おぇしたんだど。

　かあちゃんみでぇなの人がいで、

「ああ、がす。ほんでぇ、泊まらいん」

って言って、っこ、泊めらったど。

　すたっけ、夜中になったっけ、ゆらゆらゆらっと家がれるんだど。っこ、たまげてやぁ、

「おっかねぇごど、なんだか、家、たまげて揺れる」

ってったんだど。そすたっけ、

「ああ、おら家のつぁん、山から木をって出てくるどごだ」

ってるんだど。

〈ああ、そうか。山で木伐ってくんのに、こだに揺れるのがやぁ〉

って思ってだれば、そのうぢに、ますます揺れで、ぐらぐらーっと揺れ出して、立ってらんねぇんだど。

　たまげてこまってたれば、かあちゃんが見にきて、

「たまげたがぁ」

ってっから、

「おっかねくて、おっかねくてわがんねぇわやぁ」

ってえったんだど。

「いま、おらのつぁん、木小屋さ木ぃ下ろしたどごだ」

「なんだって、たまげて揺れるんだべ」

「ほだって、おら家のつぁん、地震だからっしゃ」

　それ聞いで、っこ、

〈ほんだから、木をって歩くばりでも、こだに揺れるんだな。こりゃ、とってもおっかねぇ。泊まるどごでねえ〉

と思って、逃げるどこしたんだど。

　そすたっけ、地震のつぁま、ってきて、っこどこ眺めて、かあちゃんさったんだど。

「ああ、いいっこだ。さ置いで仕事させっぺ」

　ところが、っこのほうは、そのすきに家から出て、逃げた、逃げた。海のほうさ向かって逃げたんだど。

「あんだ、あんまり揺するから、たまげて逃げでった」

「んで、追っかげなくてねぇ」

つぁん、追っかげだづもの。

　地震が追っかげんのだから、歩けば歩くくれぇ、前半分、後ろ半分、揺れるから、っこは走るにも走らんねぇ。前さ進んだと思えば、こんだぁ、逆もどりしたり、地震のつぁんとのあいだはまって、っつかれそうになったんだど。

　そごさ、乗ってきた舟あったから、っこ、どんがり乗ったどやぁ。そすたっけ、地震も別な舟に乗さってきだっつぉ。地震だから、海、ざふりざふり揺れるんだつもやぁ。さっぱり、っこの舟、進まねぇ。

　そのうぢ、地震のやづぁ、きな持ってきて、っこの舟さ、がつんと掛げだつぉ。舟ぁ、見るまに引きよせられで、

〈ああ、どうにもなんねぇ〉

と思った、出はってくっにもらった紙包みあったのを思い出して、

〈やんに『大事な時に開げろ』ってられだ。なにってるんだがやぁ〉

って、開げでみたんだど。

　そうすたっけ、ヤスリっていたんだど。金物だの切んにいいヤスリだったんだど。

「ああ、ほんでぇ、こいづで熊手の歯、って切んべ」

って、になって擦ったんだど。死に物狂いんなって擦ったんだど。

　っこは、「家さんべ」として擦る。地震のほうは、「われほうさ、舟、よせべ」として引っ張る。両方でやっているうちに、熊手の歯、ヤスリで切られて、っこの舟ぁ、どんどんさ向かったんだど。

「やれやれ、助かった」

って、に上がったっけ、地震はあきらめねぇで、なんでかんでっかげで来んのだどやぁ。

　っこは逃げた、逃げた。んだげんつも、地震は足ぇから、まだのっつかれそうになったんだど。んで、そばにあった松の木さ登ったんだど。その下に井戸あったつぉ。

　そごさ、地震、追っかけてきて、井戸の中を見たれば、っこ、底の水に映ってあったんだど。

「なんだ、このっ。そごにいだなぁ」

ってったんだど。

「よしよし」

松の木の上で、っこ、舌、べろっと出して見せだっけ、地震のやつぁ、って、

「この、おれどごさ、舌出してけつかったな」

って、いぎなり井戸の中さ飛び込んだんだど。

　そうすて、井戸さったっけ、中は水だし、深くて上がらんねぐなったどやぁ。っこは、それ見て、

「助かった、助かった」

ってって、松の木から下りて、こんだぁ、井戸の中さ、きな石から、そごらへんの土からなにから、井戸が埋まるくれぇ、ぶっ込んでやったんだど。とうとう、地震のやつぁ、井戸の中さ埋まって、出られなぐなったんだど。

　んで、いまでも揺れる地震はね、井戸の中の地震が外さ出はんべとして、もがいているからなんだどやぁ。

こんで　えんつこもっこ　さげだ

語り：楳原村男さん（大正八年生）栗原市栗駒

出典：『みやぎ民話の会叢書 第十一集 栗駒町猿飛来の伝承 楳原村男翁の唄と語り』（2005年発行）

小田嶋―ありがとうございました。実際の地震の被害は切実なんですけれども、物語のなかの地震のお話は奇想天外でとっても楽しいですね。なぜ地震が起きるのかを、お話として説明してくれています。で、もうひとつ、地震の話ですが、地震のときに、まじない言として、「まんぜろく、まんぜろく」「まんざいろく、まんざいろく」って唱え言をする風習が東日本に広く分布しているようなんですが、なんでそんなことを言うようになったのかというお話です。「福島のマンゼロク」として、倉林惠子さんお願いします。

《地震》

(２) 福島のマンゼロク

語り 倉林 惠子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

昔、あるとき、一人のぇが山の道歩いていたど。疲れもあって、眠くなってきたんで、

「ここらで、昼寝にすっぺ。」

っての岩場さあがって行ったど。畳二畳ほどの広さのどこで、ぇ、寝すぐしてしまったど。気ぃついたら、お天とうさま西さ傾いてだのよ。ぇ飛び起きて、山おりだのないん。

里さ来たれば、村の人達大さわぎしてだど。

「地震来て家つぶさっちゃ。」

って言う人もいるし、道も地割れしているし、みんな震え止まんねでいだど。村の人達から、

「お、どこで地震にあった？」

って聞かれだげんと、ぇ地震にあわねがったから返事に困ったのないん。そんで、

「俺ぁ、でしばらく昼寝してだんだ。」

って言ったど。村の人達びっくりして、

「そんじゃ、って、地震の来ねえ山だ。」

ってことになっだのしゃあ。は福島のの陰あたりにあった山だそうだぃん。まんざいろくさんが「マンゼロク」になった話だぃん。

記録：庄司アイ

出典：やまもと民話の会編著『改訂増補　民話』（2020年発行）

小田嶋―ありがとうございました。これ、実際にある山なんですね。宮城県の白石市と福島県の飯坂町の境にという山があるそうです。ほんとうにある山としての話でした。

【津波の話】

それではですね、次に地震といえば津波ですけれども、津波の話、これもそんなに多くはないんですが、宮城県にはいくつか伝わっております。気仙沼市の地区の海上に、岩が、とても見栄えのいい岩がいくつかあるんですけれども、それにちなんだお話です。「　」、これも倉林惠子さんにお願いします。

《津波》

(３) ・

語り 倉林 惠子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

むかし、（いまの）のに、なかのよいがいた。のを、のをといった。

ふたりは、まい日、はやくをこぎだし、がたには、さかなやをいっぱいにつんで、かえってきたんだと。

には、とったおとっつぁんとおかっつぁんがいて、四、しあわせにくらしていた。

ところが、ある日のこと、に日がおちても、、が、かえってこなかった。

おとっつぁんとおかっつぁんは、にでて、まっくらなにむかい、

「、はやくかえってこう。

、はやくかえってこう。」

と、よんだと。

だが、があけても、、のは、もどってこなかった。

その日一日じゅう、おとっつぁんとおかっつぁんは、に立っていたが、は、もどってこなかった。

つぎの日も、そのつぎの日も、ふたりでを見つめているうちに、とうとう一か月がすぎてしまった。

「あしたは、のほうにいってみるべ。」

ふたりは、に立つようになったと。

きのうもきょうも、ただ、をながめてくらすおとっつぁんとおかっつぁんは、がぼうぼうとなり、きものも、っきれをひもでしばりつけているという、すがたになっていったんだと。

こんなふたりのすがたを見て、のものは、

「ああ、むごいこったなあ。」

「むすこふたりを、いっぺんに、にとられてしまってはなあ。」

と、いいあったんだと。

一年が、すぎた。

その日も、おとっつぁんとおかっつぁんは、に立って、を見つめていた。

とつぜん、ごおっとひびきがし、のというが、ぐらぐらとゆれた。やがて、の水が、どうっとひきはじめ、みるみるうちに、のがあらわれ、のほうまでつづきになったんだと。

おとっつぁんとおかっつぁんが、おろおろして立ちすくんでいると、のほうから、がきこえてきた。

が　くるぞう

が　くるぞう

そのは、だんだん大きくなり、ごうごうとひびいて、村じゅうをかけめぐった。村人たちは、からのがれようと、山にかけあがった。

だが、おとっつぁんとおかっつぁんはにむかって、くるったようにはしりだした。

し　ろ　だ　い　ま　る　ー

く　ろ　だ　い　ま　る　ー

さっきのこそ、わすれもしないの声だったからだ。

ところが、いったんはひいていったが、こんどは、おそろしいうなりをあげてひきかえしてきた。そして、もろとも、ふたりをのみこんでしまったと。

よく日、しずまったに、大きなふたつのが、にょっきりあらわれた。

ひとつはいで、もうひとつはいだった。

だれいうともなく、この二つのを、、とよぶようになった。

また、そこからすこしはなれたところにも、ふたつのが、をだしていた。

そのふたつのは、まるで、子どもたちをかえしてくれと、天にむかっておがんでいるようなすがたをしていた。

「きっと、、のおとっつぁんとおかっつぁんが、になったんだべ。」

と、このふたつのを、とよぶようになったんだと。

のものは、からかえってきて、このを見ると、ほっと心がなごんだものだった。

ところが、あるのこと、がきて、おとっつぁんが、におしたおされてしまったんだと。あとには、おかっつぁんだけがのこされた。

このおとっつぁんに、まえから目をつけていたのが、のだった。

は、しずんでしまったおとっつぁんを、からひきあげさせて、じぶんのにはこびこんだ。

にはこびこまれたおとっつぁんは、ひろいにおかれ、は、まい日、それをながめては、

「ううん、まったくいいだ。」

と、ひとりでよろこんでいたと。

ところが、いつのころからか、ぐれどきになると、おとっつぁんのあたりから、

「ばばあ、ばばあ。」

と、よぶが、きこえてくるようになった。

「おかっつぁん岩からひきはなしてきたんで、おとっつぁんが、うらんでいるんだべ。」

と、きみわるがって、にちかよるものがいなくなってしまった。

けれども、だけは、

「なあに、そのうちあきらめて、おとなしくなるべ。」

と、ほうっておいたんだと。

だが、「ばばあ、ばばあ。」と、よぶは、一日一日と大きくなってくる。そして、とうとう、

「ばばあ、ばばあ。」

と、よびながら、のっしーん、のっしーんとうごくようになった。

さすがのも、きみがわるくなって、

「もとにもどしてやるか。」

と、おとっつぁんを、ふたたび、にしずめてやったと、

だからいまでも、すがたは見えないが、おかっつぁん岩のそばには、おとっつぁんが、よこたわっているんだと。

語り：畠山平作さん（明治三十六年生）気仙沼市階上／村田喜膳さん（明治三十八年生）気仙沼市本吉町

出典：児童文学者協会編著『県別ふるさとの民話40 宮城県の民話』（偕成社　1982年発行）

小田嶋―ありがとうございました。この話、津波の話でもあるし、あるいは海難の話でもあるんですね。ですから、浜で生きる人々にとっては宿命的に向き合わなければならない苦難のふたつがあわさったお話ですね。この「白大丸　黒大丸」も、津波を知らせる話なんですが、津波を知らせる話として、とても有名な話が多賀城市にあります。「末の松山　波越さじとは」を山田裕子さんにお願いします。

《津波》

(４) 末の松山　波越さじとは

語り 山田 裕子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

多賀城のはこのあたりでも大きな集落で、千軒、千軒って言われるくらい家が建っていてね、大きい町だったんだよ。

そこに鏡が池って池があって、そのそばに茶屋あったんだって。今でいう飲み屋ね。

そこへの若い衆だの、みんな飲みにいっていたんだと。

その茶屋に、こさじさんってきれいな娘さんがいてね、お酒出したりして働いていたから、みんなその娘さん目当てだったんだと。

　ところが、この茶屋さ、頬っかぶりしたが来るんだと。金も持たないで来るんだと。

だけんども、こさじさんはやさしい娘だったから、悪い顔をしねえで、あまった酒飲ませたり、ときには、小遣いくれてやったりしてたんだと。

　それ見て、おもしぇくねえのは土地の若い衆だったのしゃ。やきもち焼いて、

「いつか、あいつ、殺さなくてねえ」

って、相談したんだと。

　それを聞いたこさじさんは、に言ったんだと。

「あんだ、ここさ来ては駄目だよ。殺されるから、来ては駄目だよ」

　したら、そのが、うれしかったんだべな、こさじさんさ教えたんだと。

「何月何日に、ここさ大きな津波来て、みんな流される。おまえは、あそこの末の松山さ逃げろよ。きっとだよ」

　そうして、ほんとに、その日になったら、大きな津波が来たんだと。

みんなみんな、どっと流されたけど、こさじさんは、教えられたように末の松山さ逃げて助かったんだと。

　千軒の町もみんな流れて、今の利府のほうへ、流れていったんだと。

そんで、利府にはって町がいまでもあるんだって。流れていったの町がそこにまたできたんだね。

多賀城の末の松山は、ずっとそこにあって、津波が来るたびに、この話、思い出すね。

こさじさんが逃げて助かったこの末の松山のことは歌になって詠まれているんだと。

　契りきな　かたみに袖をしぼりつつ

末の松山　波越さじとは

波越さじとは……って言うのは、「こさじさん」のことだべかね。

語り：関山ちよさん（大正六年生）多賀城市八幡

記録：小野和子

＊この話は、２０２０年にせんだいメデイアテークで行われた展示「２０１１・３・１１　大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた《いいつたえ、むかしばなし、はなし》その８「多賀城市周辺の浜の民話」十話のうちの一話です。

小田嶋―ありがとうございました。多賀城のお話なんですけど、多賀城は古代東北の政治的な中心地でしたので、とってもにぎやかな町だったんでしょうね。都との関係もあることから歌枕になっているところがいっぱいあって、「末の松山」ってところも歌枕で、『古今和歌集』からなにからたくさんの和歌が詠まれている歌枕なんですね。今度の話は古代の津波ではなくて、昭和の三陸大津波（昭和8年［1933］3月3日）という津波があります、それについてのお話なんですが、これは松谷みよ子さんがの岩崎としゑさんの民話集を作るときに聞いた、実体験に基づく昭和三陸大津波のお話になります。「三陸の大津波」、これも山田裕子さんにお願いします。

《津波》

(５) 三陸の大津波

語り 山田 裕子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

三陸の大津波は石巻村であったのが石巻市に変わったときだったの。そすて、うちの大きい娘、石巻で持ったんだから、四十五年前（昭和八年）にねえ。

　そいで生まれて十四日目にねえ、ちょうど三日、三月三日でお節句の日であったの。

　で、私たつ、石巻でいたからねえ、なんだか、津波だあ、津波だあってねえ、川下から川上さ、その頃多分下駄はいってったら、ガラガラ、ガラガラって音すんの、逃げる音。

　私ねえ、おやじさん、体悪くて入院してあっときだから、旦那さん一人置いて逃げるわけにいかないから、赤ん坊抱いておしめを持って、二階だから階段降りたり、またあがっていったりねえ。この二階まで水上がるまでに下の人たちも流されっぺとかけてねえ。動かねえのね、うちのおやじさん、若いときだから。

　そすてるうつに、いくらか川ぶちに水が入ってきてあっけどもねえ、石巻の町まではあがらなかったのねえ。

　そのときはねえ、雄勝の方はやられたのねえ。雄勝学校の運動場まで大っきな大型船が入ってねえ、引き波で学校の運動場さあがったきりねえ、船そのままであったの。それからなんか流れたのが木のずっと上さひっかかってねえ。

　人も、あら浜ってとこあんのねえ、雄勝町のあらってとこ。そこの人はねえ、村中死んだの。ずっと昔ねえ、津波にあった人たちだけが高いところに家建てたったらしいのね。その人たちだけが残ってみな死んだんだと。

　八人家族みな死んで、その家、有名な大きい家だけがアメリカまで流れたとゆわれたの。

　別のうちでねえ、女の子が、六つばになる女の子が、母ちゃん、赤い服買ったの着せて、着せてって、その晩とってもせがむから、なんだべ今夜に限って着せろ着せろってゆうと思ってねえ。

　そすたら髪結って、おさげに結って、ほしてリボンかけてかけてって責めんだと、六つの女の子がねえ。

　そすて、こんなに責めるものを、不思議なこと、このって、そすてリボンをちゃんとかけたらば、お白粉と紅こつけてけろってきかねえんだと。

　なんだべ、今夜この子ども。気でも狂ったように変なことばりゆうってねえ、つけて、

「ああ、かわいい、かわいい」

ってゆったらねえ、脱ぎたくねえとてその支度のまんまで寝たんだと。そうすたら、そのまんま死んで浮いてたんだと。

　その子のおっ母さんはお産して四十日めくらいであったと。暗いうちの中でねえ、赤ん坊抱いて浮いてて、そすてねえ、赤ちゃんが死んだとき、ビャーッっと音してそれきっきりだったと。したら、助けてぇ、助けてけろって声、家の底ですっから、死んだ赤ん坊はなして、くぐっていったんだと。そすてねえ、手届かねえから足でグッとねえ、布団を引っぱったら、妹がすぽっと浮いてきたと。

「あら、姉ちゃん大丈夫か、お産した身体だから大丈夫か」

って、さまのとこ、こんど抱いて、どんなことしたか、屋根を抜いて、頭出して見たらねえ、じき隣のうちが自分のうちの脇さ流れてきて、その屋根へねえ、隣りのお父さんもなにも、またいで馬乗りに乗ってあったと。

そすて、あーって声をかけたれば、あー、みんな達者か、うん、今姉ちゃんのとこ助けてえと思って、って、死にものぐるいで頭で板はいでねえ、姉さまとこまず屋根の上あげて、姉さまをぎっちり抱いたんだと、妹が。

見たらねえ、さっき頭だけ出したとき、自分のうちとぶつかっていたのに、姉さまとこ出して自分が屋根さあがってみたら、その隣の家がねえ、ずっと果てしねえ方まで流されていったと、潮にとられて。自分の家は家大きいためだかなんだか、動かねえでそこに落ち着いていたんだねえ。

そすたら、助け舟がきて、その舟に助けられて、姉ちゃんとこ助けてけらい、あっためてけろ、って、炭ガンガンおこして木どんどん焚いてあっためて、そうすたらねえ、お産した身体だから、どこかしこ、みんなボッツ、ボッツと血のあと、ちぎったようにねえ、あざのようになったって、身体中が。どうすっかと思ったら、自然と治ったってねえ。

で、子どもは一人残らずみな死んだんだと。本家別家、お父さんからお母さんから家族みな死んで、新しい位牌を並べて御飯食べようと思って座って、涙ばっかり出て、わあわあ泣いたと。

語り：岩崎としゑさん（明治四十年生）牡鹿郡女川町

出典：松谷みよ子編『民話の手帖別冊 宮城県女川・雄勝の民話―岩崎としゑの語りー』

（日本民話の会 1928年発行）

小田嶋－ありがとうございました。なんか翌日の津波を予感したように、六歳の女の子が晴れ着を「着せてくれ、着せてくれ」って言ってそのまま寝たがったっていう話は、とても印象に残りますよね。これは、実話として語られています。

【飢饉の話】

地震と津波の話を終わりまして、次に飢饉の話について紹介したいと思います。みなさんもご存知のように、東北というところは飢饉に苦しめられたところですけれども、次に話してもらうお話は、みんなじつは郡のお話なんですね。本吉郡の浜の地方は、特に宮城のなかでも江戸時代の飢饉の被害が大きかったと言われています。まず最初に「おはつとわらし」、加藤恵子さんにお願いします。

《飢饉》

(６) おはつとわらし

語り 加藤 惠子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

昔のことだっけ。まあ、天保のころだいかねぇ。とってもの年だったんだとしゃ。まず、二年も三年も続いた時の話だっつのねぇ。ってぇと、田んぼのものばりでねく、山もなのっしゃ。取れねえときはなぁんもとれねえ、田んぼも畑も山も。

　そんとき、のずうっと山奥にね、お初っつうの人、さまと、まだべぇっけな（とても小さい）わらしと、三人で暮らしてたんだと。毎年が続くもんだから、海のものも山のものも、みな獲り尽くし堀り尽くして、なんにも食うものくなった。ほんで、さま、

「ここに居たって、とてもでわがんねぇ。おれ、出稼ぎして金取ってくっから。お、ここで待ってろ。なんとか、わらしといっしょに待っててけろ」

って、お初さ語って、出はっていってしまった。

　お初、さまの話、ほにして（本気にして）しゃ。毎日毎日、わらしって手間取りしたり、山さ行って芋掘ったり、木の皮まで剥いで食ったけっども、なかなかさま戻らねぇし、いつまでも続くよでしゃ。なんとも、精も根もつきはてたんだべねぇ。

　あっとき、おはつ、わらしってたっけ。わらしも、腹減って腹減って、泣き疲れて寝いってしまった。お初の肩の上から、だらんと手ぇ下げて。お初のさまも、腹減って腹減って、わがんなくてしゃ。ひょっと見たっけ、わらしの手、白い手下がってるの、大根だと見たっつの。白い大根と見えたっけ、思わず知らず、わらしの手さ咬ぶついた。がっつり咬ぶついたっけ、わらしぇから泣いたぉね。火ぃついたよに。わらし泣きんだっけ、お初ふっと目ぇ覚めたれば、目の前のわらしの手、食ったぎっとこだったって。

それから、お初とわらしの姿、どこにもっけらんなくなったんだと。いまでも、箒畑の山奥に、お初が住んだ家跡だってとこあってしゃ、お初屋敷とか、初沢って、呼ばれてんだぉね。

語り：山内郁さん（昭和四年生）本吉郡南三陸町

出典：『みやぎ民話の会叢書第十二集 南三陸町入谷の伝承 山内郁翁のむかしかたり』（2009年発行）

小田嶋―「がす」というのは、「餓死」から来ていると言われているんですけども、この辺りでは飢饉のことを「がす」「がす」と呼び習わしていました。次も「がす」の話なんですけども、のというのは、食事の後に飲む熱いのことです。「食事の後は、膳の湯を飲めよ」っていう言い習わしがあるんですけれども、その起こりと言われる、これも実話と思えるようなお話になります。「膳の湯」、寺嶋大輔さんお願いします。

《飢饉》

(７) の

語り 寺嶋 大輔（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

むかしね、つづいたときにね、がたくさんでだっつんだ。ここもそのとおりで、がでてになったんだと。

そのうちここのでね、どいの家だがわかんねげんと、一人の旅人がきたんだと。

そうしたところが、ちょうどお昼時で、そばつくって食べてだと。旅の人に、

「あんだ、どっからきたいん」「からきたんだ」

「どごもでこれ、あんだもへってきたべ。おらいでなにもできねけど、、そば食ってたから、ひとっつ食べていがんせ」

そば、ごっつぉう（ご馳走）になってね、これがら、となりにをこえで行くんだったと。

「ごっつぉさま」

っていったんだと。その人、いそいでたんだか、お湯もってこねうち、自分で水のんだと。そして、

「ごっつぉうさん」

と、かだって行ったんだそうだ。

あたりは右も左もかや、雑木林もずっとつづいててね、その人は、峠をのぼって、きゅうな坂くだって行ったわげだ。三尺ぐれえのせまい道をよっぽどさがっていったら、むこうからね、のぼってきた人あったんだと。のほうからきたか、のほうからきたか、鎌もってあがってきた。ちょうど行きあってからに、

「やっ、どっちからきたのや」

「とおってきて、払川によって、払川の物持ちの家でや、そば、ごっつぉになってきた。おかげさまで、坂も苦労なぐ、こえぐもなくのぼってこらった、おかげさまで」

「おめや、そのでそばごっつぉになって、お湯のんできたがや、水のんできたがや」

「おれ、いそいでたから、お湯でなく、水のんできたや」

「なに、水のんできたって」

鎌もった人、すっかり形相かわってや、鎌できりかけて、その人をころして腹さいて、食ってきたばかりのそば、腹からだして食べたんだと。

そばっていうのは水でひたすと、形、かわんねんだね。お湯のんだら、腹の中でとけてるから、腹さいても食べられないわけだ。水のんだから、ころされてしまった。

語り：山内泰助さん（明治四十三年生）本吉郡歌津町

出典：『宮城県文化財調査報告書第130集 宮城県の民話―民話伝承調査報告書―』

（宮城県教育委員会 1988年発行）

小田嶋―ありがとうございました。すごくすさまじいお話です。じつはこの峠（坂の貝峠）の、これは東側（歌津払川）のお話ですが、峠の西側（入谷たら葉沢）にも同じお話が伝わっています。おそらく実話がもとになっているんだろうなと思われます。「一里もどっても膳の湯は飲め」っていう言い習わしや戒めがあるんですが、そういうことのもとになっているお話です。飢饉のお話は本当にとても滅入ってしまうようなお話が多いんですが、こんなお話もあるんですね。民俗芸能のししっていうのがあります。踊りの鹿の頭のしし頭と、獅子舞の獅子の頭のしし頭、どっちも「しし」っていうんですけれども、それについてのお話です。加藤恵子さん、「騒がしいしし」よろしくお願いします。

《飢饉》

(８) 騒がしいしし

語り 加藤 恵子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

あっときの年あって、

「今年はだから、お祭り休むべっちゃやぁ」

って、休んだっけが、三年続いてしゃ。三年お祭りあげねぇでしまったっつの。

　ほうしたれば、八幡さまの法印さん万福院っつんだが、万福院のディ（奥座敷）で、ガッタガタ、ガッタガタって足踏みして、ししの鳴る音すんだっつんだねぇ。

　ほんでの人たち、おっがねくておっがねくて、とってもわがんねぇんで、拝んでもらったって。したっけ、いつまでもお祭りしねぇから、ししがお祭りやりだくてやりだくて、わけぇわがんねぇくて。ほだがら、夜一人出はって、踊ってんだぁって。そゆふに出た。

　ほんでぇ、みなして、

「神さまそんなに『お祭りやれ』っつんだもの。たとえこれ、食ったったってやるべっちゃやぁ」

ってって、お祭り出したっけ、その年たいへんな豊作になったんだとしゃ。

　おら方で、りのも、打囃子のも、「ししかっしゃ」「ししかっしゃ」って語るんだね。ディで踊ってたんがどっちなもんだか、ほいつはわがんねぇのしゃね。

語り：山内郁さん（昭和四年生）本吉郡南三陸町

出典：『みやぎ民話の会叢書第十二集 南三陸町入谷の伝承 山内郁翁のむかしかたり』（2009年発行）

小田嶋－ありがとうございます。飢饉にまつわる話には、こういうちょっと楽しいお話もないことはないんですね。「飢饉のときこそお祭りをしよう」という村人の意気込みみたいなものが感じられるような気がします。

【疫病の話】

飢饉が続くと必ず疫病が流行るっていうのは常に江戸時代からそうなんですけれども、疫病はうつる病気として常に近づくことさえも恐れられていました。次の話は、、つまり今でいうハンセン病についてのお話なのですが、実際ハンセン病は感染力が弱いんですが、なにもわからない時代には、ひじょうにその人に触れることさえ恐れられた病気です。それについての「になった娘と猫」、寺嶋大輔さんよろしくお願いします。

《疫病》

(９) になった娘と猫

語り 寺嶋 大輔（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

むがしなす、ある一軒の家あったったづんすおや。

そごの家に、とってもめごけえくして（かわいらしくて）、それから、やさしいの人いだったんだどす。だれさでもねくてなすぁ、ほんとに面倒見いい人だったんだどす。

とごろがなすぁ、ある、旅人が来たんだどす。みでな者だからって、家の人だちはうんといやがったんだどす。茶碗の欠けたのに御飯なんか盛ってせるの、の人なす、やんたがった（いやがった）んだどす。それで、ちゃんとした茶碗でせだりなんかしだんだづおんなす。

したっけ、そのあとで、の人、病んでどす（ハンセン病）になったんだどすや。どすになってなすぁ、鼻っこ欠げだりなんかするようになったもんだから、木小屋みでなもの作ってもらってす、そごさ入れられでいだんだどす。

そして、でがすぺ。っこも出るんだすぺ。そいづなす、かわいがってた猫が、ズワリズワリってなめでくれるから、でくねんだづもなす。

そのうちに、うんと悪くなって、とうとう死んだんだどす。葬式出すべと思っても、病気がどすだから、だれもかつぐ人もねんだづおなす。

和尚さんも頼んできたけども、やんたがったんだおなす。それで、ろくなお経も上げ申さねんだおすや。そして、いよいよってゆう、やんたがる下働きの人だちをせかせて、棺をかつがせようとしたらば、にわかに天上かき曇ってきたったづんすおや。そして、ボォーッと飛び出して来たったもんあったんだどす。見たら、の人がめんこがってた猫だったんだどすや。

その猫はなぁ、そごさ集まってた和尚だの、その家の人たちだの、ギィーッとにらみつけで、ぐりぐりっと棺桶ばくわえてなすぁ、舞い上がったんだどす。

「たいへんだ。どごさ行ったべ」

って、さわいだどごろ、その棺桶がのの石地蔵さんのところさおいてあったんだどすや。棺桶を運んだのが猫だったんだどす。その猫も棺桶のそばで死んでだったどす。

の人、どすになったからってゆっても、猫だけはを忘れないで、いい加減なことされるのくやしくて、地蔵さんのところさ持ってけば、みんな拝んでけるものかなぁって思って、棺桶、持ち上げて行ったんだどす。

そごで、猫もいっしょに、おいばしてやったんだどすや。

どんとはれ。

語り：佐々木健さん（昭和十二年生）宮城郡利府町

出典：『佐々木健の語りによる 遠野郷宮守村の昔ばなし』（世界民話博実行委員会1992年発行）

小田嶋―ありがとうございました。わたくし最初に「宮城県の」と言いましたけれども、このお話は岩手県遠野生まれの佐々木健さんからお聞きしたお話ですので、これだけは岩手県のお話になります。最後まで娘に寄り添って誠をとおした猫と、人間の現実の姿が対比的に描かれていたように思いますね。

【水害の話】

次に水害のお話。人が生きていくうえでは水はなくてはならないものなんですけれども、多すぎても少なすぎても人にとっては苦難になります。宮城県の仙台平野・大崎平野はたくさんの大きな河川があって、特に北上川と川はとても水害に悩まされています。河川改修などのさまざまなことも行われるんですが、そのなかでいろいろな苦労があったようです。まず「土手の人柱」、これは北上川についてのお話ですね。わたくし、小田嶋が語らせていただきます。

《水害》

(10) 土手の人柱

語り 小田嶋 利江（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

から行って、大橋渡るとしゃ、北上川の西側に、弓なりに回ってる土手あんのね。あたりの人、っての。その中ごろの河原に、この土手の人柱になったっつ、下女ッコ祀ったお宮あんだてば。お鶴明神ってんだね。

　あそこ、むがしは今みてぇな、立派な堤防でねぇからしゃ。毎年流さぇて流さぇて、北上川から、いつも水増しあったっつのね。ほんで、たびたび土手の普請あってしゃ、あたりのたち、それで困りはててたって。

　土手普請してて、みなで一服してっとき、ある人、

「やあ、こゆふに、土手の破れて困っとこさ、人柱立てっとしゃ、土手っつの、丈夫んなるもんだっつけなぁ」

って語ったっつの。そしたっけ、

「ほんじゃ、だれとご、埋めっぺやぁ」

って話んなってしまった。けっども、あたりほとりのたち、顔見知りだし、「だれそれいい」「かれそれいい」って言っただって、とっても、だれ埋めよっつことねぇ。

　したら、そこのりのさ、から来た、お鶴っていう手間取りの下女ッコ居でしゃ。その下女ッコ、毎日、さんの弁当持たしぇられて、土手さ通って来っつのねぇ。

「あの姉ッコ、よそ者だからやぁ、あいつ入れろや」

「ほんじゃ、そのことにすっぺ」

って、話決まったぉ。

　みなして、穴深く掘ってかに、足場板、穴さ渡しった。待ってたっけ、その姉ッコ、弁当持って、

「おらのさん、どこさ居たべ」

って、川面土手んとこさ来たって。

「ああ、おのさんなら、あすこに居たから、ここ渡って行げやぁ。危ねぇから、気ぃつけて行げなぁ」

って、穴に渡した足場板渡らせた。姉ッコ、「おっがねおっがね」って、ほうほうと渡ってって、ちょうど半ばまできたときしゃ、その足場板、横にぽんっと蹴っ飛ばした。するっと横んなって、すぽっと落ったっつの。で、「それっ」っつんで埋めたんだてば。可哀想にしゃ。

　それからってもの、川面土手、大嵐きても流さぃたことねぇんだとしゃ。ほんだけっど、明治になってから、あの土手の一番上まで、たぷたぷと川の水上がったことあったって。いまいま土手超えっとごして、たらたらと漏れ出したときあったっつんだ。

　ほんで、これだっつんで、あたりのたち、みなして丸太木いできてしゃ。土手さ並んで、その木で土手ぇ突いたっつの。埋めた姉ッコの名ぁ唱えながら、

お鶴さま　お鶴さま

助けてたもれ　助けてたもれ

って、ドツドツ、ドツドツ、土手突いたんだてば。そうしたっけね、たぷたぷたぷたぷと水上がってたの、ぴたっと止まって、だんだんだんだんと水下がったんだとしゃ。そしてとうとう、川面土手、破れねぇでしまったって。

　そって、埋めらぇた姉ッコのこと、

「なに、可哀想なことした。ただ埋めっぱなしでわがんねぇ。ここさ神さまにして、みなして拝むべ」

って、土手の内側に供養碑建てて、周りに桜だの杉だの植えてしゃ、いまもお鶴明神って、お宮になってあんだぉね。

語り：山内郁さん（昭和四年生）本吉郡南三陸町

出典：『みやぎ民話の会叢書第十二集 南三陸町入谷の伝承 山内郁翁のむかしかたり』（2009年発行）

小田嶋―とても重い話なんですけれども、近い時代の水害の記憶とも重なりあって、物語と実際の体験が重なりあっているようなお話です。今度はやっぱり川のお話なんですけれども、川によって向かい岸とはとても隔てられてしまいますよね。渡し舟で渡って向こう岸に渡ることもできるんですけれども、時代が進むと、橋という近代的な構築物ができてきます。そういう「橋をかける」ということの重みを感じさせてくれるような「橋掛け」の話、島津信子さんよろしくお願いします。

《水害》

(11) 橋かけ

語り 島津 信子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

むがすむがす、ずうっとむがす。

　とっても腕のいいがあったんだと。

　その村の川の流れが速くて速くてね、だれもその川に橋かける者なかったんだと。それで、そのが橋かけるように、たのまれたんだと。

　ところが、そのも、そいふな川に橋をかけるには、なじょすべやと考えて、

「とにかく現場見ねけりゃ」

と、その川を見にいったんだと。

　あんまり川の流れが速いんで思案にあまって、ぽかーっとつっ立ってたんだと。

　そしたれば、石にさわってぶち上げ、石にさわってぶち上げる水の波がくだけて、そこから鬼があらわれてきたっつんだねぇ。

「これこれ。、なにしてたや」

　鬼が、ことばかけてきたんだと。

「ここさ橋かけるように言われたんだけっども、とてもこの流れでは橋かけられねぇって、思案してたどこだ」

って、が答えたら、鬼がね、

「ようしっ。ほで、おれ、かけてる」

「ほんとかやぁ。なんぼ鬼の力だっても、この流れに橋かけられるかやぁ」

「いや。かける。そのかわり、橋かけたら、おまえのんもろうぞ。そして、おれ、橋かけるまでに、おれの名前あてたら、おれの負けだから、そのどきは目ん玉とらねぇ」

って、こう約束したんだと。

　は、そんなことできるはずねぇと思って、まず、その日はさ帰ったんだと。

　そして、つぎの朝来てみたれば、もう半分橋かかってたと。

「いやっ。やっぱり鬼だわ。これは、橋かけるかもしゃねぇわ。もねぇことになってしまったなぁ」

と思ってね、目ん玉とられるのもひどいし、

「なじょすんべやぁ」

って、がっくりして家さ帰ったんだと。

　つぎの日また来てみたれば、ちゃんとりっぱに橋かかってだったんだと。

「ああ、これはりっぱに橋かかってた。鬼め、約束だから、鬼の抜きにくるんでねぇべか」

ってね、、わらわらと逃げた、逃げた。山里走って、山越えて、逃げた、逃げた。

　そしたらば、山二ツ越したところで、たちいてね、

　目ん玉とって

きょうは　帰ってくる

　目ん玉とって

はやく　こーい

って歌っているんだと。歌ってるのは鬼のだちだったど。

　その歌、ようく聞いて、

「鬼の名前はだな」

は思って、

「わかった、わかった。ほで、なにも逃げて走ってあるくことねぇちゃや」

うんと安心して山からもどってきたんだと。

　うれしいような顔されないから、顔してね、橋のそばさもどってきて、腰おろしていたんだと。

　そしたれば、やっぱり鬼来て、

「、抜きさ来たぞっ」

ってぶから、

「待ってろ。いま、お前の名前あてるから、待ってろ」

って言って、すぐあてては悪いから、

「ずん六だべ」

「でん六だべ」

って、でたらめ言ってたんだと。

「ほでねぇ。ほでねぇ。そいつもだ。こいつも嘘だ。やっぱり、おまえのもらうからな。あはっはっはっはっはっ」

鬼、うんとにして笑うから、さいごに、

「だあっ」

ってんだと。

　そしたら、鬼はたまげてね、泡ぶくといっしょに流れていってしまったんだと。

　それで、は抜かれないで、橋だけはりっぱにかかったっていうことでがす。

よんつこもんつこ　さけた

語り：佐藤玲子さん（昭和六年生）栗原市一迫

出典：『みやぎ民話の会叢書第六集 栗駒山南山麓の昔語り むがす むがす ずうっとむがす』　（1998年発行）

小田嶋―ありがとうございました。このお話は「大工と鬼六」という名前でよく知られている有名なお話なんですけれども、どうも外国のお話がルーツなんだそうです。けれども、このお話を語った語り手の佐藤玲子さんは、外から来たお話ということではなくて、迫川という暴れ川と格闘してきた土地の人々の暮らしに根付いた話として伝承されておりました。

【旱魃の話】

最後は、水が少なくて困る、についての雨乞いのお話です。雨が全く降らないと、我々の命の糧である米が作れないわけですからとっても困るわけですよね。その雨乞いの由来を語る、「天から落ちた雷小僧」というちょっとおもしろいお話を、最後に小田嶋が語らせていただきます。

《》

(12）天から落ちた雷小僧

語り 小田嶋 利江（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

ここのね、の後ろに大きな堤あって、その向い側に、むかしっていうお寺があったのね、いまないけっども。その寺で寺男をしておるじいさんて、おじいさんがあったんだ。

　その人が、寺の用で角田に行った。で帰る途中に、たいしたおさま雨んなったんだね。そうして、っていうとこの、大きな木の下に雨宿りした。ほいて雨あがって帰ろうとしたれば、その木の下に、かわいい小僧がおったってんですね。ほいでじいさんは、小僧を連れできたった、ほの延寿寺に。そして寺の小僧として可愛がっておったって。小僧もまめまめしく働いて、小僧として勤めておったと。

　ところがある晩、弥助じいさんは、小僧が寝間には見えないのを、ひょっとのぞいて気がついた。どこだろうって、あちこちさがしてみるというと、お寺の本堂の須弥壇の上に寝ておって、そこから後光が射しておったと。「これはたいへんだ」というので、さんに言った。さんはびっくりして見ると、須弥壇の上で寝ておる。

　そこで次の日になって、和尚は小僧を呼ばって、

「おまえはなんだい。小僧でありながら、大事な本堂の須弥壇の上で寝てるとは」

と、まあ叱りつけようとしたんだね。

　ところが、その小僧はこんど開き直って、

「おれは、この前のおさま雨んとき、雲を踏み外して、天から落ちた雷だ。いまは、天に昇れなくて、小僧の姿んなって、おのうちにいるんだ」

と。はあ、さんびっくりした。

「んだらば、どうしたらば、あなたを天に戻すことができるか」

って、聞いたところが、

「稲荷山に、柴木、割木を集めて、火をつけてくれ。そうしたら、その火が燃える煙に乗って、おれは天に昇るだろう」

と。でさんは、村人を集めて、

「さあ、たいへんだ。小僧さんだと思ったら雷さんだ。雷さんを、天に昇らせなくてねぇから」

と、みんなで柴を刈り薪を伐った。その山が、いま山というんだね。

　そうしてから、

「さあ、今日は、雷さまが天に昇るんだから」

って、村人みんなが稲荷山に集まった。火をつけて煙がもんもん出て、今にも昇ろうとするときに、雷小僧は、

「たいへん世話になった。これから三年過ぎっと、このあたりは日照りで米が一粒もとれない。そのときに、これを祀って雨乞いしなさい」

といって、って宝物をね、置いてった。

　そうして、昇る煙に乗って、雷小僧は雷神に姿を変えて、天の方にどんどんと昇ってったと。みんなは驚いて拝んでおったと。

　それから、やっぱり三年たって、この辺一帯は日照りになる、米がとれない、この辺一の大きな堤も、みな干上がって、堤の中歩けだって。んだからやっぱり、「雨乞いをしなくてねぇ」となってね。そこで小僧さんの言いつけ、雷さんの言いつけ通り、みなで雨乞いをした、置いてった宝物を祀ってね。その最後の日に、とんでもない雨が降った、いままで降らなかった雨が、そのときにざーっと。

　そのことがもとになって、「金津で雨乞いをしなければ、雨が降らない」と、これがむかしからの言い伝えになった。

　おれの覚えある近いころでも、おれが小学校三年生だったころでもね、全然雨が降らない日照りで、この大きな堤もみな干上がった。そこで、雷さま昇ったところで、こんどは八大龍王祀って、八龍壇と名前を付けて雨乞いしたのね。

　ふもとに下りてたお堂を、みんなで「よいしょ、よいしょ」と担いでね、あの堤の真ん中まで、ずーっと登って担ぎ上げたんだよ。毎日毎日、暑いのにね、笠をかぶって、蓑を着て。高い木に櫓を作ってね、そこで拝んでたおじいさんが、むかし雷小僧を拾ったっていう弥助じいさんの子孫なの。その人を先頭に立てて、

あーめぇ、たーもれ、雷神よぉー

あーめぇ、たーもれ、雷神よぉー

って、触れまわるの。それこんど、毎日毎日、一週間も、声をからしてやって。やっぱ必死なんだ、神さんにすがるほかねんだからね。

　すると、やっぱ必ず降ったんだね。「ほら、金津で雨乞いしたから」って言って。降ったんですよ。おれ、そういうことをで見てたんだから。

その神さまは、いまもまだそっくりそのままだね。

語り：高橋市雄さん（明治四十二年生）角田市小山

採訪日：1985年10月20日

記録　山田 裕子（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

◆ みなさんと感想と意見の交換その二

進行　小田嶋 利江（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

小田嶋―はい、以上、長かったですけど、一応災害のお話として、みなさんにいくつか紹介しましたが、最後に感想と意見の交換としてあるんですが、ぜひ感想として言いたい方、また質問などある方ありましたらば、手をあげていただければと思いますが。じゃあ、はい。

島津―すいません、わたしは、今日、二つお話を語らせていただいたんですが、どちらも「えんつこもんつこさけた」って、終わりの結句が入るような、いわゆる昔話というか、形があるていどなってる、完成されたっていうか、そういうお話だったかなと思うんですけども、このように毎年のようにいろんな災害が起こったり、それからあの大きな十年前の災害を、これを人々はどんなふうに、これから語り伝えていくんだろうかって、思ってたんですけれども、それが自分たちが聞いてきた、「大工と鬼六」「橋かけ鬼六」だったり、地震の話だったり、そういう形になるまでに、ものすごい時間がかかるのかな、とも思うんですね。ただわたし、丸森で聞いた話で、「地獄めぐり」のお話あるんですけれども、あれは、山伏と歯医者と軽業師が、地獄に一緒に落ちるんですが、それがなんで一緒に落ちたかって言うと、村じゅう飢饉になって、村じゅうの人が大半が死んでしまった、そのときにたまたま三人が一緒に死んだんだ、ていうような。すると、「あれ、昔話って、ちょっと不思議な所があるなぁ」と思うところ、その不思議なところに、意外とこういう現実のつながりみたいなとこが、ひっかかってるのかなぁ、ていう思いで。今日聞いたお話のなかにも、これからまた、形を変えて伝えられていく間に、ま完成っていわないと思うんですけど、そういう昔話に変わっていくものがあるのかなぁ、なんて思いながら聞かせていただいたし、自分も語らせていただいて、そんなことを考えました。みなさんがどんなふうに考えていらっしゃるのか、聞ければいいなと思います。

小田嶋―ありがとうございます。いまいくつも語ってもらったお話のなかにも、ほんとうに昔話のようなお話もあれば、体験の記憶そのもののお話もあるし、それが分かれているんではなくて、地続きのようにして、重なりあっているってことが、垣間見れたんじゃないかなと思うんですが、震災の体験とも含めて、そのへんのことについて、なにかご意見などある方…はい。

Ａ―今日はありがとうございました。いま、地続きの話聞いて、わたしも、今日一番最初に、「放射能から逃れて」原発の話があった。そこで、「あの日から10年が経って」ていう、今日この会の中に、飢饉の話、飢餓の話が入っているっていうことが、「すごく重い意味を持つのかなぁ」というふうに思って聞いてました。なんか、写真でもでたけど、「原子力、明るい未来のエネルギー」ていうふうに、あっちのアーケードのところに書かれているっていうのは、やっぱり『おはつとわらし』の話のなかで、腹が減ってわけが分かんなくなった、そこにかぶさるように子どもが泣き叫ぶ声っていうのがあって、そのあと二人が消えてしまう。だから、飢饉の飢餓、腹が減ってわけが分からなくなる、食べれなくなる恐怖っていうものの先に、どうしても原発のような「明るいエネルギー」を求めてしまうという、どうしてもやっぱり、魔法のようにそれが思えたのかもしれないっていう、立ち止まれなかったっていう、人間の飢えない恐怖に対する思い、葛藤みたいなものがあるのかなと思って聞いてました。ちょっと感想のような感じになるんですが、そこから、放射能災害から逃れていくというところで、飢饉の民話の後の話がいまも続いてあるんだ、ということがすごく重く感じられたという、ありがとうございました。

小田嶋―ありがとうございました。かつての飢饉という人類の苦難と、現代の放射能の避難ということを、地続きでとらえていただけたことは、すごく有り難いなぁと思いました。ほかにどなたか、ありますでしょうか。はい。

山田―わたしは、津浪の話させていただいたんですけど、わたしの話の前に倉林さんが『白大丸　黒大丸』っていう話をしましたね。あのお話は、すごく犠牲になられた方多い気仙沼の岩井﨑、階上っていうところで聞いた、もう四十年以上前に聞いたお話なんですね。そのとき話してくださった方の、『白大丸　黒大丸』と一緒に話してくださった話が、すごく心に残ってるんですけど、その方は明治生まれの方で、平作さんって方だったんですけど、お父さんがブリ漁に、自分の親父がブリ漁で沖に出たときに、なんか箪笥とか戸板だのいっぱい流れてくるから、「あ、これ、津波きた」と思って、しばらく沖に居たんだそうですね。つぎの日、戻ってきたらば、もう自分の住んでた集落が、全部無くなっていて、そして自分の女房（おがた）も、奥さんもですね、それから子どもたちもみんな死んでたって言うんですね。で、その後また一緒になった人いて、その人、平作さんが生まれたのかどうか、詳しいことは分かりませんけど、そのお話と一緒に、この『白大丸　黒大丸』を、親父は話してくれたって言うんですね。ですから自分の体験といっしょに、伝えられた話を、一緒に語ってくれたんだなって。だからそうやって、すごく心にどちらの話も残っているんじゃないのかな、それをわたしに聞かせてくれたんじゃないのかなって思っています。その出会いと一緒にお話も心に残っている話です。

小田嶋―ありがとうございました。メインのお話というか、昔話の中心にあるお話と、一緒に語られる体験とか記憶とか、やっぱりそれもお話というのがあって、そうしたものが全部重なりあって、伝承の語りの現場にあるのかなというのは、とても感じます。ほかになにか、ありますでしょうか…はい。

Ｂ―今日はありがとうございました。第一部から、みなさんが経験したことを含めて、じっくりお話を聞ける機会をいただいて、ほんとうに震災から十年かかっての、時間をいただいたなぁと思って、ありがたく聞いてました。そのなかで、やっぱり原発の安全神話が崩れて、それからバス四十台で町ごと移動するような経験てのを目黒さんが語ってくださって、その戻れないことをどう生きるかっていう、ほんとうに難民と呼んでも、言わざるを得ないような生活を強いられてる方たちが日本の中にもいて、こういう言葉をこれまで、じゃあ、わたしが自分が生きている国のなかで、こういうことが起こるかっていうところまでを、全然想像できていなかったな、ていうのをあらためて今日、目黒さんのお話をお聞きするなかで感じました。それは同時に、世界の中で起こっているさまざまな事を考えるきっかけにもなるような眼を開いていただいたように思います。それと同時に、早坂さんとか庄司アイさんが語られる、その故郷の姿とか、もう戻ることはできないかもしれないけど、自分の感性を育ててくれた場所として語られる土地の話っていうのが、とても胸をつかまれて、いま早坂さんも書いてらっしゃいましたが、かつての閖上じゃなくって、ここにできていく均質化した町を自分は見てるという話をしたときに、みなさんが語ってくださる語りとか、民話の世界、民話で語られる語りに使われているような、やっぱり、言葉に肌ざわりがあるいというか、その言葉を聞くだけで、なんか言葉以上のものがそこに見えてくる。風景とか質感とか匂いとか、いろいろなものが浮かび上がるようなものを、いっしょにたずさえたような言葉っていうのは、やっぱりそういう周りの風景含めて、いろんな環境から作られた、できあがった言葉なのかなというのを、あらためて思った時に、いま震災から十年たって、復興というもとに出来上がっていく道の中から、同じように、かつてみなさんが語ってくださったような語りが、ある肌触りを持って、持った言葉として、いろんな感性を総動員してくるような言葉として、どうでてくるのだろうかというのが、なんか、すごくすごく難しいなという思いにかられました。で、それと同時に、ただ、今日のようにこのようにみなさんが、自分の感性を総動員させて、絞り出してきたような言葉っていうのを、受け取ったときに、このことをたずさえて、単に物語としてではなくて、どうそれを自分たちの生きてるいまの目の前の風景とか社会とか、そういうことに接続していけるかっていうのを、ほんとうに問われてるなっていうのを、あらためて思いました。今日はほんとうにありがとうございました。

小田嶋―ありがとうございました。ほんとうに物語を物語としてではなく、自分たちの体験や記憶や、手許の部分まで、そこをつなげて感じていただけるということは、われわれとしても語りをして、ありがたい、そこまで受け取っていただけるととてもありがたいと感じます。では、ほかにありましたら…あ、はい。

Ｃ―自分も、感想みたいな感じになると思うんですけど、ぼくの地元は、福島の南相馬市の小高区っていうところで、仙台に、ぼくは大学が仙台で、かれこれ十五年くらいは仙台に居るんですけれども、震災自体は仙台で、街中で体験しました。やっぱりその十年、くくるのがあんまりぼくは好きじゃなくて、ずっと時間が、一つの時間が続いてると思っているので、数字として十っていうのはなにかときりがいいので、ついつい言うときに、戸惑ってしまう自分がいるんですけど、十年目にして変化があったのは、地震が起きたときに、最初のころはやっぱり怖かった、怖い感情があったんですね。地鳴りなんかも、かなり、震災前よりはすごく敏感に感じ取るようになったというか、耳の方で、すこしなにか、なんでしょう、そういう直感が働くようになった気が、自分ではしていて、結構「ああ地震だ」って、意外と周りの人より先に気づいていた自分がいたりしてたんですけど。最近コロナなんか、ほんと十年前よりも、インターネットとか、スマートフォンとか、やれることが増えて、たくさん、分からないことがいっぱい増えたと思うんですね。なにが一番大事なことなのか、自然にとって、人間にとって。ここ最近、地震が起きたとき、怖いと思うと同時に、安心する自分がいることに気づいてしまって。なんでかっていうと、これが太古のむかしから地球にある、言葉っていうか、地球が生きてる鼓動なんだな、と思った、思えるようになってきたというかだから地震があった時って、いろんな、一瞬、戦争とか、なんて言えばいいんでしょうね、複雑な問題と一瞬たぶん止まると思うんです。みんなたぶん、「あ、地震だ」となると思うんですけど、「あ、いま、ほんとに自分と地球と、これ以外のリアルなことってないんじゃないか」と感じる瞬間で。ま、おっきくなればなるほど、それがパニックの方にかたよっちゃうんですけど、感情は。震度２とか３ぐらいのときって、結構いま、一番シンプルな気持ちで、いま自分が生きてる地球の世界に向き合えてる気持に、最近なるようになってるのが、なんか自分でも、うれしいような　　ような、よく分からない感情だったんですけど、それを今日、第二部のお話で、一番最初の井戸に落ちた地震ていう、なんていうんでしょう、滑稽な話でしたよね、地震が人の形をしていると、で追っかけてきて、井戸の中に落とされて、わあわあ、わあわあ叫んでるみたいな、ちょっとかわいらしい、可哀想だけどちょっとかわいらしい、その地震の親父が。それにちょっと近い感じの感情っていうんですかね、地震が起きたときに対応してるみたいな、自分が、そういう近い存在みたいな。まそれに、腑に落ちた、地震の話が重なったのが、ちょっと不思議で。ま、うれしかったのと、ちょっとこんな話、自分で調べてみたいなと思ったのと、あと僕は、ちょっと長くなってるかもしれないんですけど、こういう語り部さんが語ってる場所に来るのは、ほんとに初めてくらいなんですね。ちょっと偶然な縁で、今日ここに、このイベントも知って、この席に座ってるんですけど、あらためて、やっぱり昔の人の方言とかなまりっていうのは、すごく気持ちいいなぁと、話聞いていて。最初は意味が気になったので、そこのテキストとか、おいおい見てたんですけど、だんだん追わないで、眼を閉じて、耳だけで聞いてると、意味わからないとこもあるんだけど、なんとなくこういうことだろうなみたいなのは、ま、わかる、わかるっちゃわかるんで。なんとなく、そういうなんでしょうね、日本語なんだけど、分からない気持ちよさって言ったらいいんですかね。ま英語まではメロディアスじゃないんですけど、でも英語ほどかっこよくもない、なんかすごい親近感がある、おばあちゃんとか、ひいおばあちゃんとかに触れてるような気持になるような、その安心感をともなって、歴史の事実がきてる、語りの行為の価値って、これはすごいことだなと思っていて、逆に言うと僕たちの言葉は、百年後どう伝わっているのか、気になるというか、昔の人からしたら、この言葉は自然に聞き取れるわけで、自分たちの言葉は、百年後とかの人に、生ってるように聞こえてるのか、なんかどう気持よく伝えるためには、しゃべればいいのかなって、すごく、それぞれの語り部さんの上手なお話を聞いきながら、自分のしゃべり方、しゃべり方ってなんだろうなと考えてました。今日ほんとによかったです。ありがとうございました。

小田嶋―なにかとっても示唆的なことを、話していただいたような気がします。あの自然というのは、水害もそうだし飢饉もそうだし、すべての災難はそうですけれども、それは苦難であるとともに、やっぱり自然の恵みでもあるので、そこを離れては人間は生きていけないわけですから、水の場合がそうであるように。だから、それと同じように、自然に対して、人間はどんなふうに関わっていくのかということが、じつは放射能の問題、これはまた別の問題という姿を現してくるんじゃないかと思いますけれども。だからとっても、自然の鼓動を感じるっていうことは、その鍵になることかもしれないなと、ふと思いました。ありがとうございます、はい。まだ、どなたかいらっしゃいますか…はい。

Ｄ―座ったまま失礼します。今日の二部の民話のなかに含まれてる、語りの中に含まれてる災害と、一部の距離みたいなものを、ちょっと、どうしていいか分からなくなっています。二部で語られてるような、なにか起きた災害とか出来事に対する理解みたいなことが、感性を持って理解しようと、理解できるような世界に人はもういないんだな、ということを強く感じました。なにか不思議なこととか、いままで結びつけて物事を理解するっていうことが、たとえば原発の話でも、復興の話でも、そういうことがいまもうできないんじゃないか、と。これを理解しようとしたときに、ここでもすごくいろんな言葉が語られたと思うし、メディアテークでも、十年間、いろんな言葉を尽くして、繰り返ししようとしたんですけど、なんか、その難しさを感じました。

小田嶋―ありがとうございます。あの、ほんとうに分かる気がするんですけど、なんとかその感受性を取り戻したいなとは思います。どうしていいかは分からないんですけれども…はい。あ、じゃあもう一人の方。できるだけ、すべての方を聞きたいと思います。はい。

Ｅ―じつはわたし、今日は東京から来たんですけれども、ま、当事者ではない、この地元ではないので、そういう意味では、聞くことしかできないんですね。ですから、じつはわたしは、ドキュメンタリー映画を、「うたうひと」という、ドキュメンタリーを見てから、ずっと小野さんのことですとか、とても興味を持っていて、お話の素晴らしいと思って。語りなんですけれども、やはり聞くこと、どうゆうふうに語れるかっていうのは、すごく難しい問題だと思うんですが、聞き続けることというのが、一番大事なのかなって、結局民話にしても、今日の語りの中でも、やっぱり自然がなにも語ってくれないわけですよね、それを人間が、その自然との対話を、結局その民話のなかでしてるんじゃないのかなっていうのを、とても強く感じました。今日は参加できてよかったです。ありがとうございました。

小田嶋―ありがとうございました。えーと、もう一方…はい。

Ｆ―はい。わたし、民話のボランティアをさせていただいているんですけど、この震災、とくに原発の問題なんかを、いま民話にして、「これは、むかしではなく、いまの話なんだど」と言って、語りたいなと思いました。それではいけないっていうこと、でもっと勉強したいと思います。今日は体験談、ありがとうございました。

小田嶋―ありがとうございます。昔話というくくりをせずに、いろいろな語りをしていただければなと思います。ほかにいらっしゃらなければ…あ、もう一方、はい。

Ｇ―わたしも今日、神奈川の方から来て、初めてゆうわ座に参加させていただきました。少し自分の経験が…わたしは震災を海外で知ったという、日本にすら当時いなかったんですけれども、その時の個人的な記憶が、わたしは震災の前に、自分の父親亡くしてるんですが、彼は山で亡くなったんです。テレビで見たときに、父親のことを思い出したりしたことがありまして、その時の自分の　　というのが、震災の記憶として自分の中にはありました。で日本に帰ってきたときに、震災後に自分がどうやって帰って行ったらいいんだろうっていう戸惑いが、ずっとありまして、ドキュメンタリー映画を見たりして、それこそ『うたうひと』とか、あとは小森さんの映画見たりしながら、小野さんの活動を知って、体験を語ることをされてる方々がいるっていうのが、わたしにとっては、救いになりました。経験したことが自分の中にもあるんですけど、18年たちますけど、なかなか語れないこともあるけれども、それを言葉にしている方々がいらっしゃる、わたしの経験したことではないけれども、その語りを聞くことで救われているということを、ちょっと知っていただけたらうれしいなと思いますし、語ることの意味って、もしかしたら、わたしは震災で家族は亡くしていないけれども、これから先もその震災の話を聞いたり、読んだりして、なにかと結びつけて、自分の人生のなにかと結びつけて、自分に救いを見出したり、自分の語りを始めようとする方もいらっしゃるんじゃないかと思って、こういう語りの会がある素晴らしい意味を感じております。なんで人は語るのかなというのを、ずっと考え続けていたんですけど、失ったものがあるから、語るって行為もあるんじゃないかなと、失ったからこそということは、なかなか言えないですけど、失ったところから私たちが、見出すというか、獲得するというか、過去の人とか、過去の時間とか、過去の町の姿っていうのを、これから生きている人と共有したいとお思ってるときに、やっぱり語りっていうのは生まれてくるのかなと思って、やっぱり語るということは生きていくことなんだな、なのではないかなと、わたしが今日の話を聞いて感じたことです。ありがとうございました。

小田嶋―ありがとうございました。「聞いて語る」ということの一つの「望み」みたいなことを語っていただいたような気がするんですけど、先ほどから出ている、無機的な現代の世界の中で、どうやったら感受性や想像力を保っていけるのか、というか、無いものを獲得できるのかということは、もしかしたら、その「聞き語る」ことに、なにか手がかりというか、種があればいいなあという希望を、持っていたいなと思いました、はい。ありがとうございます。えーと、だいぶ時間が押してるようなんですが、ぜひという方があれば、最後に…はい。

Ｈ―ありがとうございました。ちょっとたちいった話になってしまうかもしれないんですけど、末の松山のお話あったとき、ふっと出てきたので、よかったら利府の方の神社、八幡神社にご神体が流れてきたと、多賀城から流れてきたというお話が、もし出来ればいいなと思っていたんですけども、つながってるなというのがあって。そういうふうなのがたされて、民話というお話が作りあげられていくのかな、と思ったりはしたんですけど。第一部の震災の体験された方々のお話を聞いて思ったのが、民話的に話されてたとおっしゃってましたよね。第二部で、なんかちょっとぞっとするお話がありました。その語り口調が、実家が農家なので、むかし祖母だったりとか、しゃべってるような感覚で、「こういうのあったんだよねぇ」「ああゆうのあったんだよねぇ」「あらぁ」っていうしゃべり方、方言が、似てるなぁ、ていうか、こうなんていうんでしょ、淡々と、なんとなぁく、こんなことを言ってたよ、ああゆうこと言ってたね、という感覚で、ひどい話でも、聞いてくことで、ああ、こういうの、そういえばやってたなと、子ども心に残ってたのと似てるなと感じたものですから、ちょっと一言、言わせていただきました。

小田嶋―ありがとうございます。そう言っていただけると、語っている方は、とても語り手冥利に尽きると思います。ありがとうございました。じゃあ、ぜひという方がいなければ、このあたりで終了していこうと思いますので、よろしいでしょうか。では、第８回民話ゆうわ座を、これにて終了させていただきます。みなさま、長い間、ほんとうにご苦労さまでした。ありがとうございました。（拍手）

飯川―はい、ありがとうございました。小田嶋さん、進行、お疲れさまでした。ありがとうございました。それではみなさま、お気持ちが、まだまだ、あふれてたまらない方も、多くいらっしゃると思います。お手元のアンケートにせひご記入をいただいて、受付の方に投函してお帰り下さい。なお、関連書籍についても、後の方でまだ販売をしておりますので、お帰りの際にお立ち寄りください。では、お忘れ物の無いようにお帰り下さい。本日はまことにありがとうございました。（拍手）

記録　小田嶋 利江（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

注記

（1）全編の記述は、原則として当日の録音資料の文字おこし記録によった。ただ、明らかな誤りや言い間違いなどは修正し、適宜（）内に注記を付した。

（2）第一部・第二部とも、書籍・資料などからの引用・語りの部分は、原則として出典の記述表記により記録した。ただ、第二部の語りにおいては、出典の話の趣旨に添う範囲において、語り手の表現を盛り込んだ場合がある。出典の正確な表現については、当日配布の冊子を参照。

（3）意見交換における話者名は、「民話声の図書室」メンバーに限り個人名を記した。

―以上―